

Fig.26 藤原京の調査位置図 (1 : 12500)

1 左京八条四坊（日向寺跡）の調査

天香具山の南麓、南浦集落に今も日向寺という寺があり、その周辺が日向寺跡と推定される。寺の沿革や寺号は不明だが、『扶桑略記』推古二十九（621）年二月二十二日条に、聖徳太子造立九院の一つとして「日向寺」の名があがっている。同じように『聖徳太子伝暦』は太子建立十一院の一つに数えるが、『上宮聖徳法王帝説』の掲げる太子建立七寺には入っておらず、太子信仰の隆盛とともに数に連なつたと考えられる。日向寺の境内には塔跡の土壇が残り、かつては直径2 m以上ある心礎とおぼしき巨石があったが、明治初年頃に破却されたという。この塔跡推定地および現地地形から、金堂の南東に塔をおいた伽藍配置が推測されている。1981年度に塔跡西側でおこなつた発掘調査で、8世紀後半の土坑を確認した（『概報11』）。出土瓦からみて7世紀に遡る寺院であることは疑えない。1995年に2カ所で事前調査をおこなつた。

A 第75-17次調査

（1995年2月）

本調査は、住宅建て替えに伴う事前調査として橿原市南浦町で行つたものである。調査地は、日向寺の推定塔跡土壇のすぐ南に接することから、伽藍に関する遺構の検出が期待された。

そこでまず土壇南辺に幅0.5m・長さ5 mの東西方向の北トレンチを設定した。基本的な層序は、表土・茶褐色土・黄褐色土・黄白色砂質土（地山）で、茶褐色土層には瓦が含まれていた。黄褐色土層には、瓦器を含む南北方向の耕作溝が5条あり、この直下が地山であることから、古代の面は削平されているものと推定された。



Fig.27 左京八条四坊（日向寺跡）の調査位置図（1：2000）

次に、北トレンチより14m南に、約3m四方の南トレンチを設けた。基本層序は北トレンチと似るが、黄褐色土と地山の間には薄い黄白色粘質土層が入る。瓦の出土量は極端に少ない。

茶褐色土上面で、土坑群S X 15、東西方向の耕作溝2条、小穴1個を検出した。S X 15からは鞆羽口が出土した。黄褐色土層では、北トレンチと同じ南北方向の耕作溝4条を検出した。その下の黄白色粘質土層では、柱穴と思われるS X 13と斜行する溝S D 14を検出した。S X 13の掘形は幅70cmを測り、深さ約60cmが残存していた。日向寺の塔跡土壇に隣接する発掘調査であったが、掘立柱柱穴1個を検出するに止まった。今後の調査の進展が待たれる。

遺物は、少量の瓦が出土した。丸瓦14点(1kg)・平瓦107点(6kg)である。

B 第78-3次調査

(1995年5月)

本調査は農業用倉庫の新築に伴う事前調査である。調査地は日向寺跡の西方に位置する。調査面積は15㎡。

基本層序は地表面から、耕土・灰褐色土・褐灰色土・黄褐色土混り灰褐色粘質土・黄褐色土(地山)の順である。褐灰色土から黄褐色土までの各面で耕作溝を検出した他、黄褐色土上面で南北溝S D 09と穴S X 10を検出した。南北溝は穴より新しい。S D 09は幅1.1m・深さ35cmで、溝内からは叩き目をすり消した瓦が出土している。S X 10は東西約1.4m・南北推定1.5m・深さ70cmで、柱抜き取り状の穴をとまうが、この穴だけでは柱穴であるのか土坑であるのか判断できない。なお、発掘区の南1/3は近代の暗渠によって破壊されている。

遺物は、少量の瓦と土器が出土した。瓦は、丸瓦6点(0.7kg)・平瓦42点(3.5kg)が出土した。

(日向寺関係史料)

○太子所造寺等。合九院也。天王寺。法隆寺。元興。中宮。^{母后宮}橋寺。蜂岡。^{賜秦川勝蜂岡者廣隆寺也。}池後。葛城。日向寺等也。^{巳上}〔扶桑略記〕推古二十九年(621)二月二十二日条

○始起四天王寺。(略)。法隆寺。(略)。元興寺。(略)。中宮寺。(略)。橋樹寺。(略)。蜂岡寺。(略)。池後寺。(略)。葛城寺。(略)。日向寺。^{或説不入}定林寺。(略)。法興寺。(略)。合十一院。^{本九院云々}〔聖徳太子伝暦〕

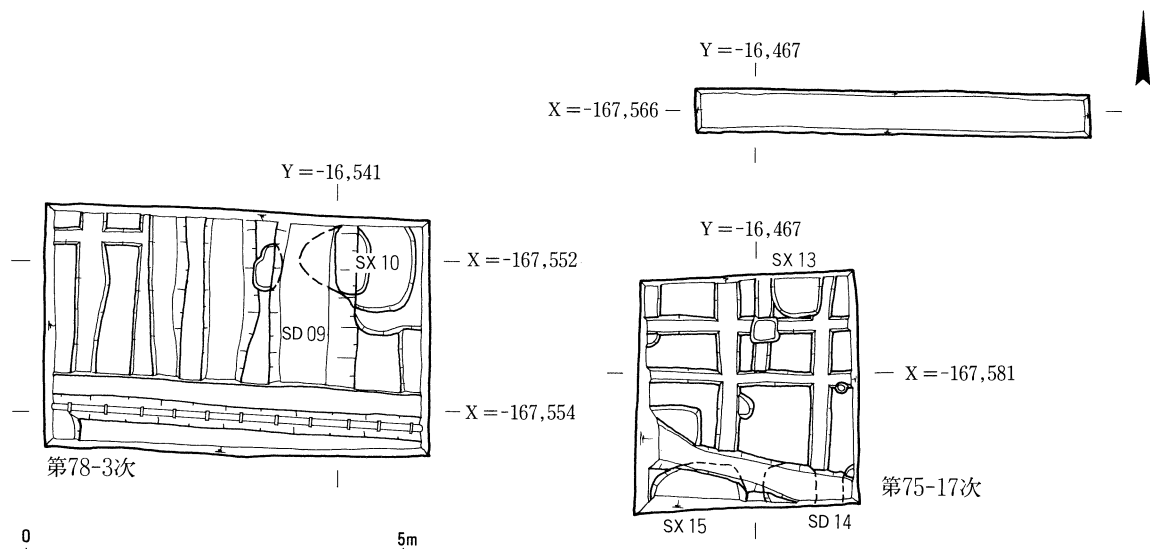


Fig.28 第75-17次・第78-3次調査遺構図(1:100)

2 左京十一條三坊（雷丘北方遺跡第5・6次）の調査 （第75-16次・第78-8次調査）

（1995年1月～4月、1995年12月～1996年1月）

当調査部では、県道飛鳥檜原神宮前停車場線の新設やそれに付随する諸工事にともなって、明日香村雷一帯で1991年より継続的に発掘調査を実施してきている。調査地は、雷丘から小山に続く丘陵の西斜面と飛鳥川右岸に至る平坦地である。

従前の調査によって調査地の西方には、中心部に東西5間・南北4間の正殿をおき、その東西に南北に細長い建物を2棟ずつと、南にも同規模の東西に細長い建物を配置し、その外側を一本柱塀で区画した東西長80mにも及ぶ大規模な施設の存在が明らかになってきた。これらの施設は、一部の建物に改作を加えながらも、7世紀後半から8世紀前半にかけて存続していたことも明らかになっている。また、正殿が藤原京左京十一條三坊西南坪・西北坪の南北中軸線上にあり、東西の脇殿がさらに十一條々間路を越えて北に延びることから、これらの施設は少なくとも二町占地であったと推定されるようになった。

以上のような成果をふまえながら、第75-16次調査は、大規模施設の東外郭の有無の確認や調査区内に想定される東三坊々間路の検出、さらには東南坪の状況を把握することを目的に実施した。調査地は6筆に別れた水田と畑で、西及び北に低く籬壇状に造成されており、西と東南の水田面の比高差は約2.7m、遺構検出面では約2.85mとなる。このような地形のなかで工事

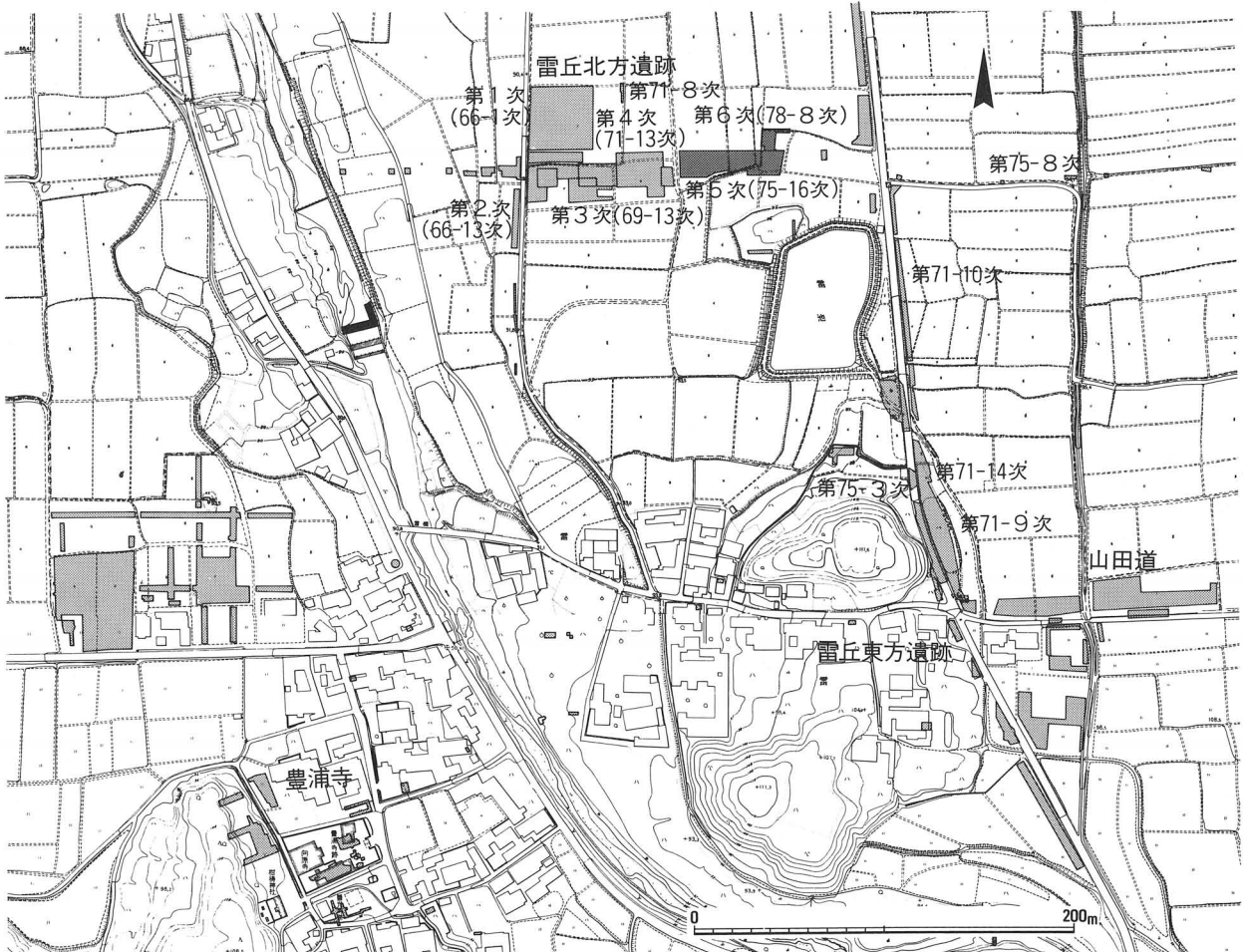


Fig.29 雷丘北方遺跡および周辺の調査位置図（1：4000）

計画にあわせて南北約14m・東西約55mの調査区を設定した。調査面積は710㎡である。第78-8次調査は、第75-16次調査区の東端北側に接して調査区を設定し、第75-16次調査で検出した遺構の続きを確認することを主な目的とした。調査面積は102㎡である。

調査地の層序は、後述するように二時期の整地土層が存在するために、各々の水田や畑では異なっている。西の水田での層序は、上から耕土(20cm)、床土(15cm)、灰色砂質土(15~20cm)、灰色粘質土(15~25cm)、7世紀後半の整地土、灰褐色砂礫層・茶褐色粘質土層となる。灰褐色砂礫層は、南東から北西に向かって流れる古墳時代流路の堆積土で、流路は北東にある茶褐色粘質土を掘り込んでいる。整地土層は従前の調査でその存在が明らかになっていたもので、炭を含んだ淡青灰色砂質土や黄褐色粘質土からなり、厚さは最も厚い部分で約0.6mとなる。先述の古墳時代流路の凹んだ部分を埋めるように、調査区の西南部に拡がっており、南は調査区西端から東へ約18mの地点と、北は調査区西北隅を結んだ線の西南部となる。従って西の水田では、基本的に整地土層及び茶褐色粘質土層上面で遺構検出をおこない、一部については整地土層を除去して調査をおこなった。

西から2番目の水田での層序は、耕土(約20cm)、床土(25cm)、淡茶褐色土(15cm)、淡茶褐色粘質土(20cm)、褐色粘質土となるが、東半部では褐色粘質土の上に東からの整地土層である暗灰褐色粘質土が厚さ約15cmほど堆積している。ここでは褐色粘質土層及び整地土層上面で遺構検出をおこなった。

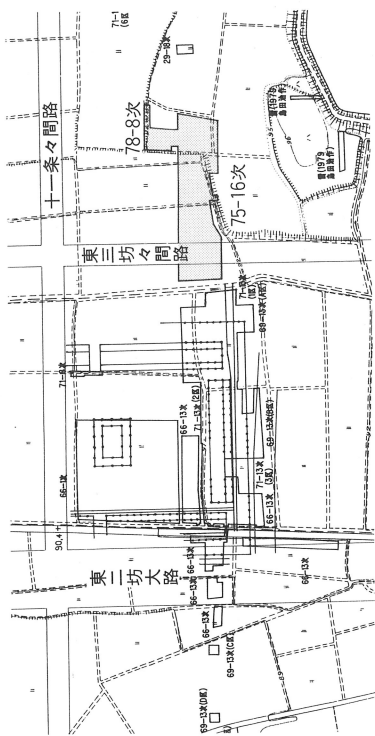
東端の畑地では、東から西へ2mの範囲は10~15cmの耕土の直下に地山(岩盤風化土)が現れる。地山は西に向かって傾斜しており、その傾斜面に水平に保つように盛土整地がなされている。整地土層は暗灰褐色粘質土、黄褐色粘質土、赤褐色粘質土、淡青灰色砂質土などからなり、層の変わり目には拳大の礫を敷きつめている部分もあり、厚さは0.6m前後である。この畑地では地山の部分を除いた全域に整地土が認められ、整地土の下半部は調査区東端から西へ22mの範囲の先の西から2番目の水田まで及んでいる。後世の耕地造成により削平を受けているため、本来の厚さは不明であるが、丘陵傾斜面にある程度水平面を保つための造成は、それが雛壇状であったとしても相当大規模な工事であったと思われる。整地土層には炭化物や土器が含まれており、土器の年代から整地は7世紀前半におこなわれたものと推定される。この地区の遺構検出は、基本的には整地土層や地山の上面でおこなった。

遺 構

第75-16次調査区

掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、溝2条、貯水施設、自然流路のほかに多数の土坑、耕作溝がある。これらの遺構は年代的に古墳時代、古代、中・近世の遺構に分類でき、古代の遺構はさらに7世紀前半、7世紀後半、8世紀の3時期に細分できる。

古墳時代の遺構 自然流路S D 3617と土器埋納坑S X 3600がある。自然流路S D 3617は先述したように調査区の西南隅にあり、南東から北西に流れる。北東の肩を検出したのみで、幅は10m以上、深さは1m以上となる。礫と砂が互層になって堆積し、相当の水量のあったことを窺わせる。堆積土の上半部から布留式土器が出土した。土器埋納坑S X 3600は調査区東寄りにある。地山の暗褐色粘質土を掘りくぼめた中に、布留式土器の大型壺を口縁部を東にして横位に埋めている。土器棺の可能性が強い。



雷丘北方遺跡調査位置図

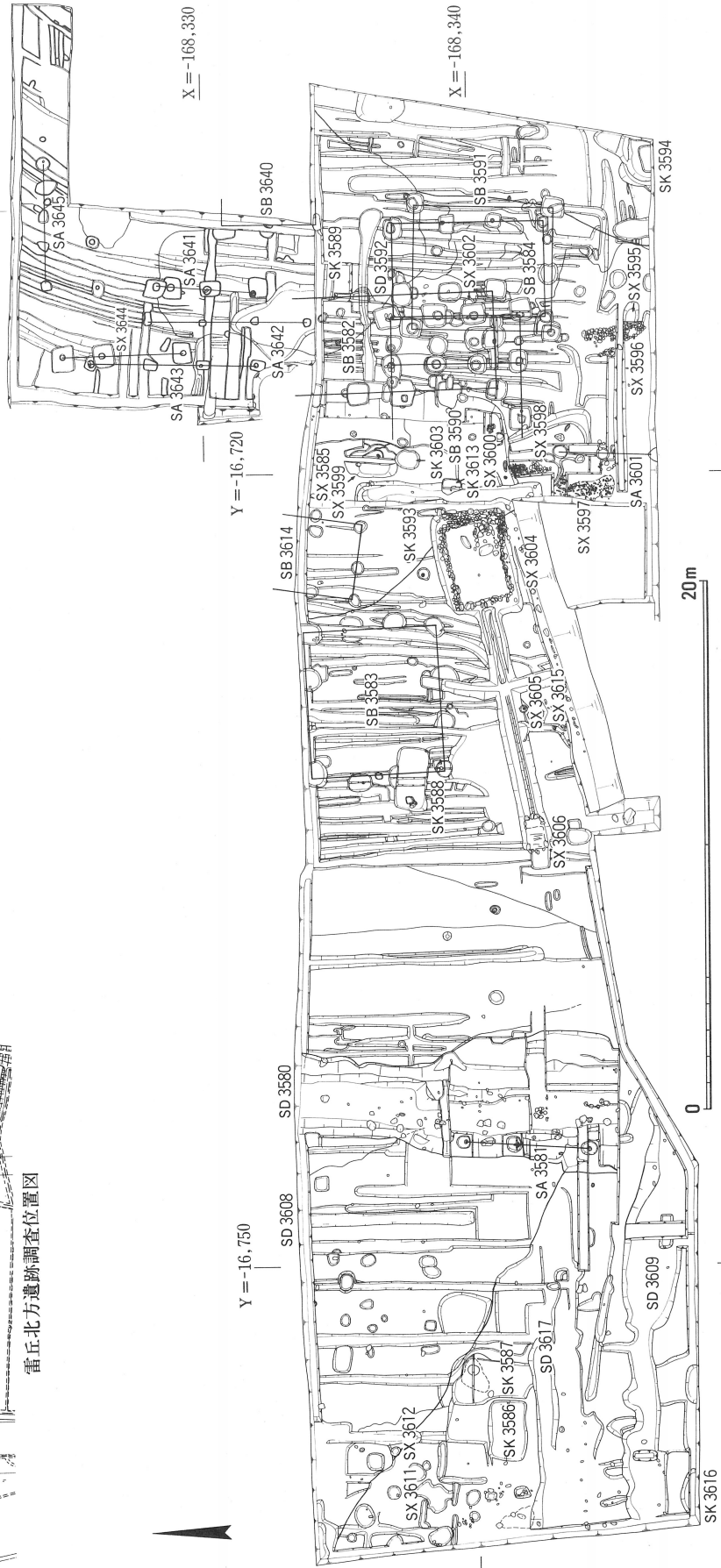


Fig.30 雷丘北方遺跡第5・6次調査遺構図 (1 : 250)

7世紀前半の遺構 掘立柱建物 S B 3582・3583・3614、掘立柱塀 S A 3601、南北溝 S D 3580、土坑 S K 3603・3613がある。

建物 S B 3582は、桁行 5 間以上・梁間 2 間の南北棟建物で、東側柱列の柱穴の一部は 7 世紀後半の土坑 S K 3589によって壊されている。柱間は桁行・梁間ともに 1.8m 等間である。この建物の西には不整円形の小土坑 S K 3603・3613がある。いずれからも飛鳥 I の土器が出土した。建物 S B 3583は、東西 3 間・総長 5.5m、南北 3 間・総長 5.0m の東西棟建物で、柱間は不揃いである。柱掘形からは飛鳥 I の土器が出土した。7 世紀前半の整地土層は、この建物のすぐ東で途切れているが、柱穴の深さが 0.4m 前後と浅いことを考慮すると、建物部分を含むこの地区にも整地がおこなわれていた可能性が残る。

建物 S B 3614は東西 2 間・南北 2 間以上の建物で、方位は北で東にふれ、柱穴の平面形は円形である。塀 S A 3601の柱穴も同様の特徴をもつ。S A 3601の柱穴は整地土層の途中から掘られた可能性があり、建物 S B 3582より先行する遺構と考えられる。このほかに、整地土層の層の変わり目には、焼土の集中する部分 S X 3595・3602、礫敷を施す部分 S X 3596～3598、炭化物が堆積する部分 S X 3585・3599などがあるが、明確な遺構としては把握できなかった。

南北溝 S D 3580は、調査区中央西寄りにある。幅は 2.9～5.2m、深さは 1 m 前後で、北流する。地山の軟らかい南半は幅広くあふれている。堆積土は大きく 3 層にわかれ、7 世紀前半の土師器・須恵器とともに木簡削屑、木片などが出土した。なお、この溝の南辺は 7 世紀後半の整地土層により覆われる。S D 3580から西には 7 世紀前半の遺構を検出していないので、この溝は東に展開する 7 世紀前半の遺構群の西を限る施設であった可能性がある。

7世紀後半の遺構 調査区東半部に建物 S B 3584、溝 S D 3592、土坑 S K 3589・3594、中央部に土坑 S K 3588、西半部に塀 S A 3581、溝 S D 3608・3609、土坑 S K 3586・3587がある。

建物 S B 3584は桁行 3 間・梁間 2 間の南北棟で、桁行柱間は 1.9m 等間、梁間は 1.8m 等間となる。東西溝 S D 3592は、建物 S B 3584のすぐ北にある、深さ 0.1m 前後の東西溝である。土坑 S K 3589は、深さ 1 m・南北 10m あり、S B 3582の柱穴を壊して掘られ、S B 3584建設時には埋め戻されているので、時期的には両者の間に位置づけられる。飛鳥 IV を最新とする土器が出土しており、この土坑にかさなる S B 3584や S D 3592の年代は、7 世紀後半でも第 4 四半期以降 8 世紀前半までの間と考えられる。S K 3589の性格は明らかでない。土坑 S K 3594も同様の時期であろうか。

土坑 S K 3588は、長辺 2.2m・短辺 1.2m の隅丸長方形をし、深さは 0.5m である。建物 S B 3583の柱穴を壊して掘られ、埋め土から 7 世紀後半の土器が出土した。

南北塀 S A 3581は溝 S D 3580埋没後に作られた。いずれの柱穴にも直径 0.1m 前後の柱根が残る。柱間は北が 1.9m、南が 2.25m である。東西溝 S D 3609は、7 世紀後半の整地の途中に掘られたもので、幅 1.6～2.1m・深さ 0.3m 前後である。東端で南北溝 S D 3580を掘り込む。整地にとともなう湿気抜きの機能を果たしたと考えられる。南北溝 S D 3608は、幅 0.5m・深さ 0.2m の素掘り溝で、調査区南半には及ばない。従来の藤原京の条坊復原では、この位置付近に東三坊々間路の西側溝が想定されている。しかし、東側溝が検出されていないことや調査地の南と北には丘陵が間近にせまっていることから、この溝をにわかに西側溝とは断じ難い。ただ、7 世紀後半の整地土層は東三坊々間路想定位置よりも東に及んでいないことは注目される。

土坑 S K 3586は土坑 S K 3588と形態的に類似している。深さ0.4m。埋め土からは飛鳥Ⅳの土器が出土した。土坑 S K 3587は不整形を呈し、深さは0.1m前後である。北半部には、焼土・木炭が集中しそれに混じって白く焼けた獣骨細片が出土した。このほかに整地土層の上面で特に炭化物の集中した部分が認められ、飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器とともに、大官大寺式軒丸瓦が出土した。

8世紀の遺構 建物 S B 3590・3591、溝状土坑 S K 3593がある。建物 S B 3590は南北3間・東西2間以上の総柱建物である。南北の柱間が1.6m等間であるのに対して、東西の柱間は東が1.8m、西が2.2mとなる。西の間を中央間とみなせば、本来は南北3間・総長4.8m、東西3間・総長5.8mの総柱建物であったと推定される。柱穴には礎板がわりに扁平な自然石を据えたものや、礫と瓦で根巻きしたのものがある。北側柱列の東から2番目の柱穴では奈良時代中頃の平城宮所用軒平瓦6691Aを根巻として使用していることから、この建物は8世紀後半以降の建築と考えられる。

土坑 S K 3593は S B 3590の西を画するように掘られている。西肩は削平され、現存最大幅は0.8m、深さは0.2m、長さは7.1mとなる。埋め土からは奈良時代後半の土器が出土した。

建物 S B 3591は4カ所の柱穴からなり、東半部の建物のうちでは、柱穴の重複関係から最新のものである。南北は5.2m、東西は4.7mの規模である。建物の四隅の柱穴のみ残り、他の柱穴は削平されたと考えることも可能であるが、柱穴の深さは0.4m前後残っているので、ここではやぐら状の建物を想定しておきたい。

このほかに調査区の西半には縄叩きの瓦を含んだ土坑 S K 3616や、小柱穴 S X 3611・3612などがある。

中・近世の遺構 東西・南北方向に掘られた中世の素掘り溝多数と近世の貯水施設 S X 3615がある。貯水施設は集水枡 S X 3606、送水管 S X 3605、貯水槽 S X 3604からなり、全長は約14mとなる。東西1.5m、南北0.8mの範囲を玉石を組んで囲み、その上面に孟宗竹の割竹を敷き並べて集水枡とし、そこで集めた水は孟宗竹2本の節を抜いた暗渠式の送水管で東の貯水槽へ送られる。貯水槽の側面は玉石積みの石垣とし、内法は東西約3m・南北約1.8m・深さ約1.9mとなる。貯水槽の東西長を3分割する位置に直径0.2m前後の丸太材が立て置かれていることから、ここに「踏車」などを設置し、揚水したものと考えられる。貯水槽の埋め土からは江戸時代末期の磁器が出土しており、当時この地域で耕作に従事した人々の水に対する苦勞がしのばれる。

第78－8次調査区

掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条、などがある。いずれも時期決定の決め手を欠く。建物 S B 3640は、柱間1.8mの柱穴3個を確認した。東西棟の西妻であろうか。柱筋は7世紀後半の S B 3584の東側柱筋にほぼ揃うが、柱の礎盤に自然石をおく仕事は8世紀の S B 3590に共通する。南北塀 S A 3642・3643は、1.6mを隔ててほぼ平行する南北塀。柱間は、S A 3642が2.0m、S A 3643が2.1mである。東西塀 S A 3645は、柱間1.8mで3間以上であろう。柱列 S X 3641は、柱間1.85mで北で東にふれる。S X 3644は、北の柱間が1.5m、南の柱間が3.0mある。あるいは柱間1.5m等間の建物の東側の柱列であろうか。S A 3643より新しい。

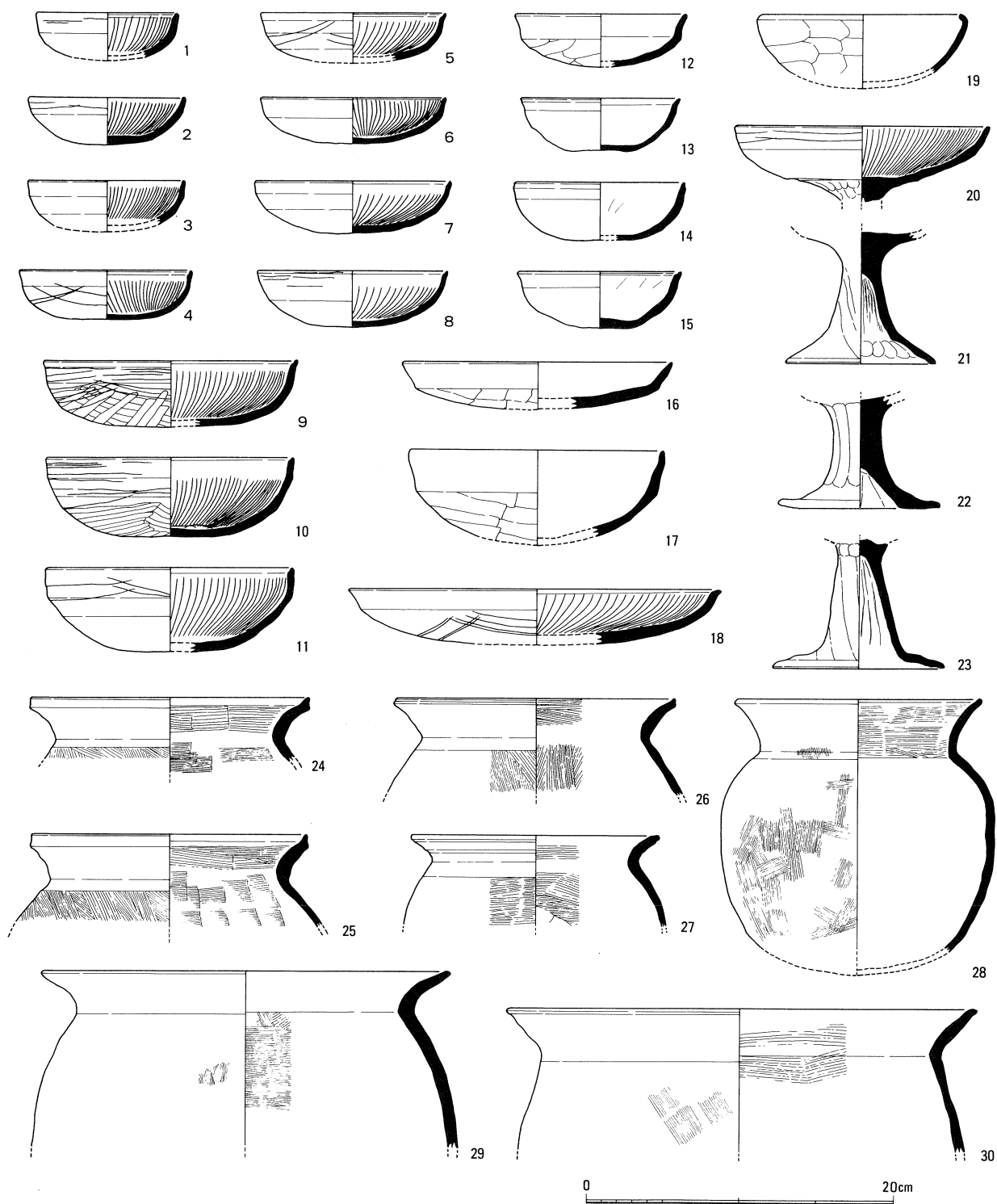


Fig.31 南北溝S D3580出土土師器 (1 : 4)

出土遺物

土器・土製品、瓦類、石製品、金属製品、木簡がある。

土器・土製品 土器には、古墳時代の布留式土器から近世の磁器に至る各時期のものが含まれているが、ここでは南北溝S D 3580出土の土師器・須恵器及および第75-16次調査区の東半部整地土層出土の須恵器を図示した (Fig.31・32)。

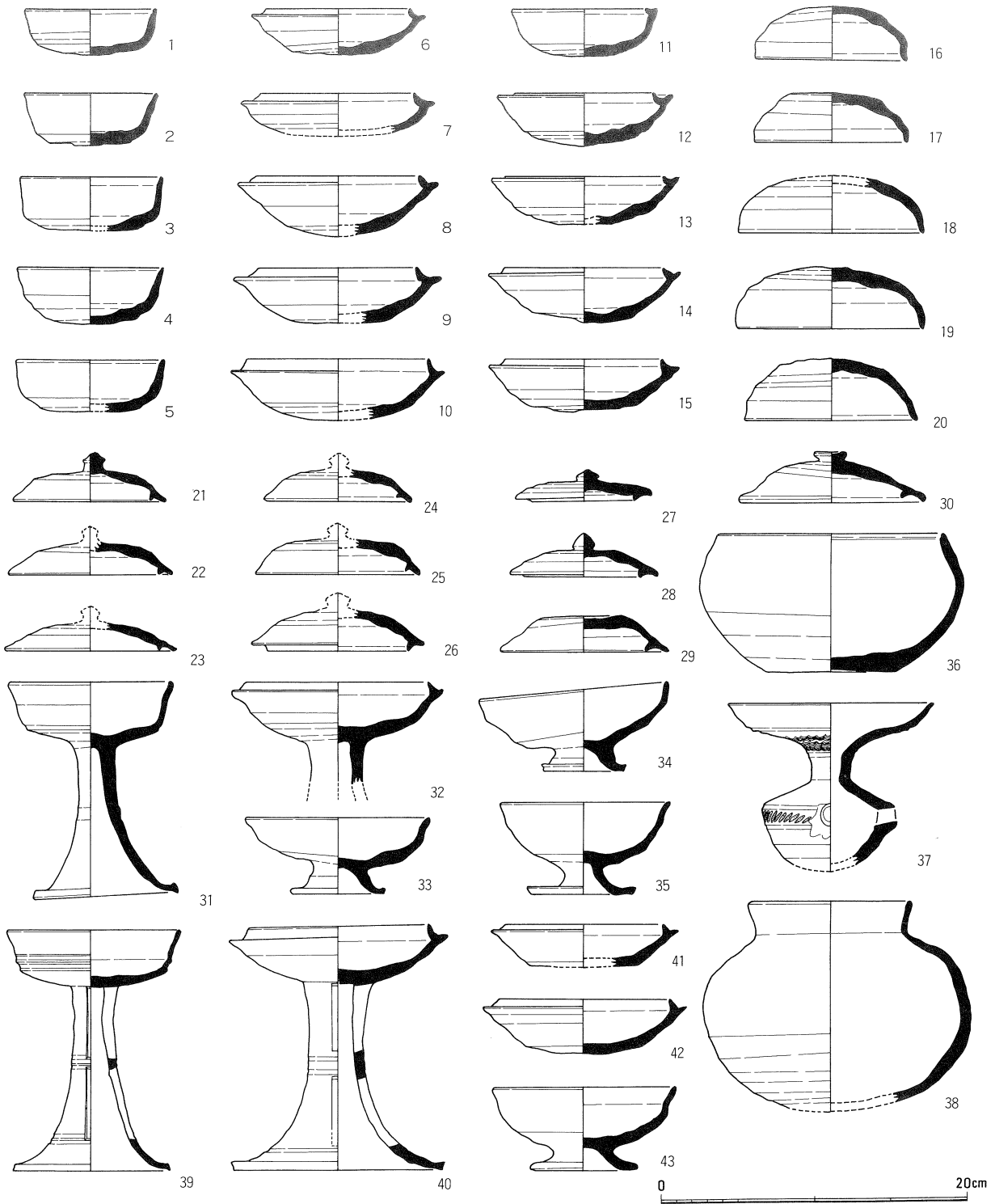


Fig.32 南北溝S D3580・東半部整地土層出土須恵器（1：4）

土師器 すべてS D3580から出土したものである。杯・皿・高杯などの供膳具と甕・甑・竈などの煮沸具がある。

杯には、杯C（1～11）・H（12）・G（13～15）がある。杯Cは、口径16cm前後・器高4.3～5.5cmのC I、口径12.0～12.3cm・器高3.0～3.7cmのC II、口径9.0～11.0cm・器高3.2cm前後のC IIIの法量にわかれる。外面調整では、C Iにはケズリを省略するもの（11）、C IIにはミガキを

施すもの（5）と施さないもの（6～8）があり、若干の時期差のある個体が含まれるものと推定される。杯Gは、底部外面は未調整とし口縁部にヨコナデ調整を施すものであるが、口縁外端面が沈線や凹線状になるもの（13・14）や、内端面に沈線を施すもの（15）などがある。

皿には、外面にミガキを加え、内面に放射暗文をめぐるした皿A（18）と、底部外面をヘラケズリし口縁部との境に稜をもつ皿H（16）がある。

高杯は、全形をうかがえるものはないが、杯Cを浅くした形の杯部に筒状の脚をとりつけた高杯B（21）、脚の外面に面取りを施した高杯H（22）、中空で太い筒部と脚端部を長く外方にのばした高杯X（23）がある。

椀H（11）は、内側に折り曲げた口縁端部を除いた外面にヘラケズリを施すものである。鉢H（17）は、口縁部にヨコナデ、体部下半は横方向にケズリを加える。甕（24～30）には、甕A・甕Bがある。図示したものはいずれも内外面にハケ目調整を残すもので、口縁端部を上方にひき延ばすもの（24・25）、内側に丸く小さく肥厚させるもの（26・27）、丸くおさめるもの（29・30）などがある。

須恵器 杯G（1～5）・同蓋（21・22・24～26・28・29）、杯H（6～15）・同蓋（16～20）、高杯蓋（23）、壺蓋（27）、高杯（31～35）、鉢（36）、すり鉢、臙（37）、短頸壺（38）、平瓶、長頸壺、甕などがある。

杯Gは、口径8.4～9.5cm・器高3.0～3.6cmあり、底部外面の調整は、1がロクロケズリ、他はヘラキリである。杯G蓋は、受部端部が口縁端部より下方に突するもの（26）、ほぼ等しいもの（21・22・28・29）、内側に入るもの（24・25）などがある。つまみの形は、断面形が圭頭形になるもの（21）や宝珠形になるもの（28）があり、ほかにつまみのないもの（29）がある。

蓋ではこの他に、壺蓋（27）、高杯蓋（23）、椀ないし高杯の蓋（30）と推定されるものが出土している。なかでも30は中凹みの円形につまみをもつもので、淡青灰色を呈し、堅緻な焼成である。

杯Hには、底部外面にロクロケズリを施すもの（6～11）と、ヘラキリのままのもの（12～15）がある。前者には小片が多く、受部径8.4～13.2cmとばらつきが認められる。11は、蓋受部がほとんど立ち上がり、底部から口縁部にかけては丸味をもたせて成形した特異な形態である。ヘラキリ未調整のものは、受部径10.0cm・器高3.5cmのもの（12）と、受部径10.9～11.5cm・器高3.1～3.6cm（13～15）のグループがある。杯H蓋は、頂部の調整はほとんどがヘラキリであるが、20のみヘラキリやロクロケズリの痕跡を残さず、指で強くナデつけた痕跡のみが残る。

高杯には、長脚無蓋高杯（31）、長脚有蓋高杯（32）、短脚無蓋高杯（33～35）の3種類がある。長脚の高杯ではいずれも透かしが省略されている。短脚の高杯は椀状の杯部をもつもので、杯部と脚部の高さの比は約2:1となる。鉢（36）はロクロケズリを施した平底の底部と内彎しながら内側にのびる口縁部からなり、口縁内端面に一条の沈線をめぐらす。臙（37）は扁球形の体部と大きく広くひらいた口縁部からなり、口縁下半部に楕描きの波状紋、体部に楕による刺突紋をめぐらす。円孔部分には粘土をはりつけ外方に突出させ注ぎ口としている。口縁部内外面および体部外面に多量の自然釉がかかる。

壺（38）は、球形の体部と短く立ち上がる口縁部からなる広口の短頸壺で、体部下半にはロクロケズリを施す。

整地土層出土土器 東半部整地土層からは、土師器杯C、高杯B、甕、須恵器杯G・同蓋、杯H・同蓋、高杯、甕などが出土したが、土師器は摩滅が著しいため、ここでは須恵器のみ図示した。41・42は杯Hで、41の底部外面はヘラキリ、42はロクロケズリを施す。高杯には3種ある。39は、小さな杯部と長脚二段透かしの脚部からなり、杯部下半には断面三角形の突線をめぐらす。脚部の透かしは二方向にあげられ、下段透かしの上端と下端には各々2条の凹線がめぐる。杯部および脚部外面には自然釉がかかる。40は、杯Hに長脚二段透かしの脚部をつけた有蓋高杯である。脚部の長方形透かしは各々二方向で、下段透かしの上端に2条、下端に1条の凹線がめぐる。短脚無蓋高杯(43)の脚端部は丸くおさめられ、口縁部は外反する。

ここに紹介したS D 3580及び東半部整地土層出土の土器は、いずれも飛鳥Iの範疇に含まれるものである。整地土層出土の土師器の遺存状態が悪いため、両者の総合的な比較はおこなえないが、須恵器の長脚高杯についてみると、S D 3580出土品では透かしが省略され、また有蓋高杯の蓋受部も退化する傾向が認められる。このような点を考慮すると、整地土層出土の土器群はS D 3580出土の土器群よりもやや先行する型式のものと思われる。

ところで、飛鳥・藤原地域での土器編年でいう土器型式飛鳥Iは、小墾田宮推定地溝S D 050(『報告I』)から始まり、川原寺下層溝S D 02(『概報10』)→甘樞丘東麓焼土層S X 037(『概報25』)→飛鳥池遺跡下層灰緑色粘砂層(『概報22』)、に至る変遷が考えられる。年代のほぼ明らかな山田寺下層出土の土器群(『概報20』)は、甘樞丘東麓S X 037と飛鳥池遺跡下層にまたがる土器を含んでいるものと推定される。今回報告したS D 3580出土土器群は、ロクロケズリのおこなわれる須恵器杯Hなど一部の土器をのぞき、大半は飛鳥池遺跡下層の土器群と共通した要素を持っており、山田寺下層の実年代を勘案すると、年代の下限としては640年頃が想定される。

土製品としては土馬・円面硯があるが、いずれも小片である。また、漆の付着した土器片がS D 3609などから出土した。S D 3609出土の漆付着土器には、器面の内外に漆を塗ったと推定される7世紀後半の鉄鉢形須恵器がある。このほかに平安時代の緑釉陶器、中・近世の青磁・白磁・染付磁器片がある。

瓦類 軒瓦、丸・平瓦のほか熨斗瓦・面戸瓦が出土した。

軒瓦(Fig.33)はすべて第75-16次調査区から出土した。軒丸瓦11点と軒平瓦15点がある。軒丸瓦は、大官大寺所用の6231が6点と最も多い。小片ばかりで種別は不明である。藤原宮所用6281Aも1点ある。その他はいずれも飛鳥時代のもので、奥山久米寺IV Cが1点、飛鳥寺Ⅲが1点と型式不明が2点ある。軒平瓦も大官大寺所用6661が6点(B; 4点、C; 1点)と多いが、四重弧紋軒平瓦も7点出土した。ほかに平城宮所用6691Aが1点ある。6691Aは雷丘東方遺跡(『報告I』『概報24』)でも出土した。

熨斗瓦と面戸瓦は大官大寺の所用品である。

丸瓦は619点(62.6kg)、平瓦は1,899点(213.9kg)ある。平瓦は、凸面布目平瓦と粘土紐桶巻き作り平瓦が多く、少量の一枚作り平瓦がある。

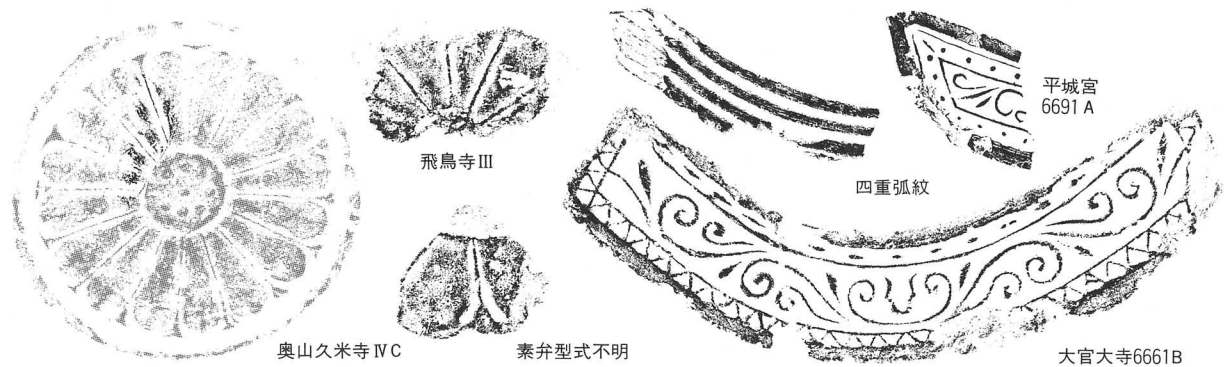


Fig.33 雷丘北方遺跡出土軒瓦

金属製品 銅製品、鉄製品、鉛製品がある。銅製品には帯金具の一部や釘、鉄製品には釘などがある。鉛製品は2点あり、1点はS D 3609出土で耳環の一部と考えられる。断面直径は0.5cmである。ほかの1点はSK3588から出土した。直径0.6cm、長さ4.8cmの棒状品である。いずれも飛鳥IVの土器が共伴する遺構からの出土である。

石製品・石材 砥石2点、滑石製白玉2点のほかに榛原石がある。滑石製白玉のうち1点はS D 3580から出土した。直径0.7cm、厚さ0.2~0.5cm。

木簡 S D 3580から出土した削り屑3点がある。いずれも墨痕を止めるのみである。

まとめ

今回の調査を通して、その目的の一つであった大規模建物群の東外郭施設を確認することはできなかった。建物群との検出レベルを比較しても、第75-16次調査区の方が最大0.26mほど高くなっている。このような状況から判断すると、本来設置されていた東外郭施設が、後世に全て削平されたものとは考え難く、外郭施設は当初から設置されなかったものと推定される。

その占地については、従来の調査によって左京十一條三坊の西北坪と西南坪の二町を占めていることが推定されていた。今回の調査においても、7世紀後半の整地が東三坊々間路推定位置より東には行われていないことを確認し、先の見解を裏付ける資料を得ることができた。

東南坪においては、予想に反して7世紀前半に行われた整地と7世紀前半から8世紀後半に及ぶ建物の存在を確認し、この地が藤原京期のみならず、その前後にわたって長期間利用されていたことが判明した。なかでも、7世紀前半には2棟の建物とそれらの西を区画する南北溝、8世紀後半には総柱建物と溝状土坑が各々配置されている。整地を含めたこのような遺構のあり方は、調査地の東南方に展開する雷丘東方遺跡の状況に類似しており、注目される。雷丘東方遺跡では、7世紀前半の整地や奈良時代の倉庫群の存在が明らかになっており、それらは推古天皇の「小墾田宮」、奈良時代の「小治田宮」と関連するものと理解されている(第71-9・10・14次調査『概報24』)。今回、東南坪で検出した遺構群も「小墾田宮」や「小治田宮」の範囲に含まれる可能性があるが、調査地が限定されているために、整地の規模や広範囲での建物配置およびその変遷などを明らかにすることはできなかった。その詳細な検討は今後の周辺地域の発掘調査を待ちたい。

3 右京二条二坊の調査（第78－6次）

（1995年10月）

この調査は、個人住宅建設にともなう事前調査である。調査地は橿原市醍醐町143番地にある水田で、藤原京右京二条二坊西北坪にあたる。また、調査区の南方約30mには、かつて喜田貞吉によって藤原宮大極殿跡にも比定されたこともある「長谷田土壇」が位置している。

調査は、南北15m・東西6mの調査区を設定して行った。調査区の層序は、上から水田耕土（0.2m）・床土（0.2m）・灰褐色砂質土（0.3m）・褐色砂質土となり、地表下約0.7mにある褐色砂質土層の上面で遺構検出を行った。検出面である褐色砂質土上面では、一部に灰褐色粗砂が堆積しており、砂層中からは弥生時代前期の土器片が出土した。

検出した遺構には、7世紀後半の掘立柱列SX 8532と中世の掘立柱建物SB 8533のほかに、多数の素掘り溝がある。掘立柱列SX 8532は南北に並ぶ2間の柱穴列で、柱掘形は一辺0.5mの不整形をなし、深さは0.25～0.4mである。これらの柱穴は北で西にふれて並ぶ。東西棟建物の東妻柱列とも推定できる。掘形の1つからは、7世紀後半代の土師器甕が出土した。素掘り溝は藤原京内で一般的にみられるもので、水田の畦畔に平行ないし直交して掘られ、幅は0.3m、深いもので深さ約0.2mである。12世紀後半から13世紀後半にかけての土器が少量出土した。掘立柱建物SB 8533は、南北3間（5.8m）、東西2間（4.2m）以上の総柱建物で、柱間は不揃いである。建物は北でわずかに東にふれる。柱掘形は径0.2～0.3mの不整円形をなし、径0.1m前後の柱痕跡が残る。明らかに素掘り溝を埋め立てた後に建てられている。この調査区では最新の遺構であり、素掘り溝の出土遺物から13世紀後半以降の遺構と考えられる。

以上のように、今回の調査においては調査区が狭少なこともあって、藤原京関係の遺構を検出することはできなかった。また「長谷田土壇」についてはその位置が二条々間路に近いこともあって、その年代を新しく考える意見もあり、今後さらに周辺での調査が待たれる。

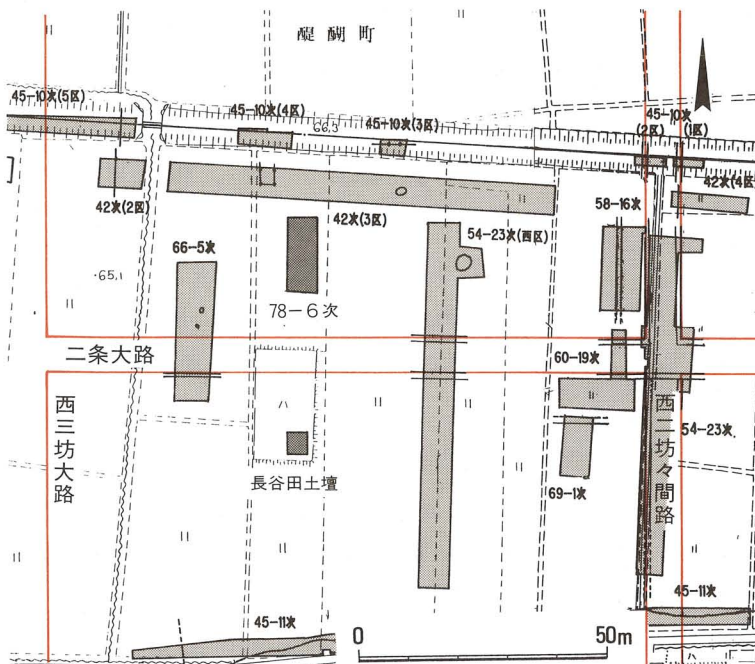


Fig.34 調査位置図 (1:1500)

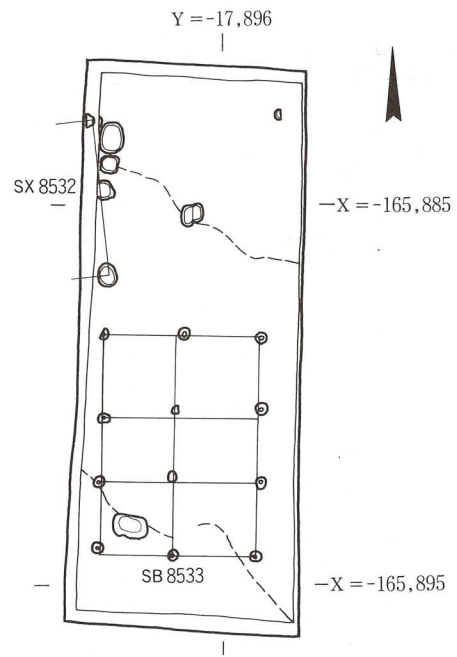


Fig.35 第78－6次調査遺構図 (1:200)

4 右京七条一坊の調査

A 第75-15次調査

(1994年12月～1995年2月)

この調査は、市営住宅建設に先立って実施したものである。調査地は藤原京右京七条一坊西南坪にあたる。この坪内には、坪の中軸線にそって正殿、後殿、脇殿、門などを整然と配した一町規模の宅地が存在したことが、過去の調査によって明らかとなっている（第19次調査『概報7』、第49次調査『概報19』、詳しくは『右京七条一坊報告』参照）。今回の調査では宅地の西側の状況を明らかにすることを主な目的とした。調査面積は約300㎡である。

遺構

調査区の基本層序は、上から盛土・灰褐色砂質土・明黄灰色砂質土・黄灰色粘質土・茶褐色土・褐色土・青灰白色粘質土・黄褐色砂礫となる。現地表面下約1mの茶褐色土上面で1回目の遺構検出をおこない、中世の素掘り耕作溝を検出した。続いて現地表面下約1.2mの褐色土上面で2回目の遺構検出をおこない、藤原宮期の遺構を検出した。褐色土は、藤原宮期を最新とする土器を含んだ藤原宮期の整地土と考えられる。さらに、褐色土を除去し青灰白色粘質土（一部、黄褐色砂礫層に交替する）上面において、藤原宮期およびそれに先行する遺構を検出した。以下では、褐色土上面と青灰白色粘質土上面で検出した遺構について概略を記す。

褐色土の上面で検出した主な遺構には、東西溝1条のほかに、洪水砂堆積と多数の素掘り耕作溝がある。東西溝S D 383は、調査区北側にある浅い素掘り溝である。東にいくにしたがって幅が狭くなり北に曲がっていく。幅1～4m・深さ0.2m。水が流れた形跡を示す砂層などの堆積はなく、下層遺構に起因する不等沈下でできたくぼみの可能性が高い。藤原宮期を主体とした土器と共に軒瓦を含む少量の瓦、焼土などが出土した。調査区南側には、飛鳥川の氾濫によって堆積した半円形の洪水砂堆積S X 381がある。S X 381はきめの細かい砂で埋まり、流木と思われる自然木を少量含む以外は、7～8世紀の土師器甕の口縁部が1点出土したにすぎ

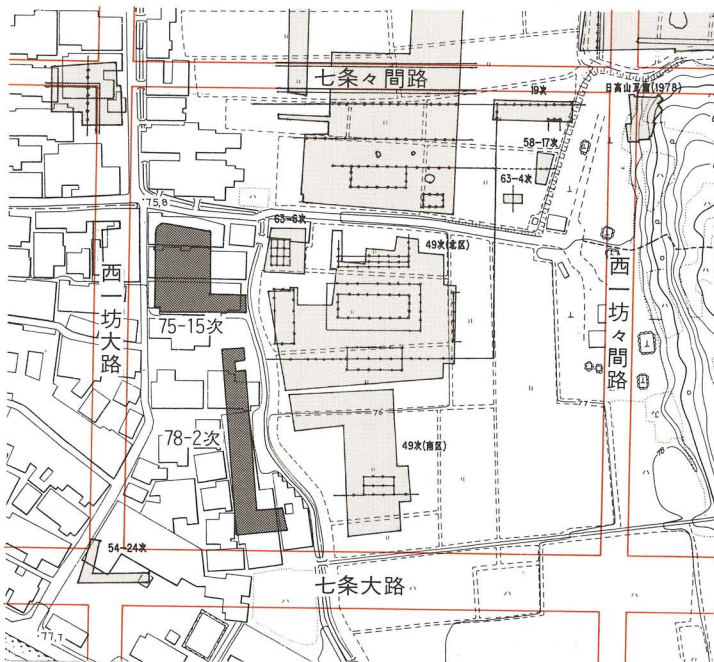


Fig.36 調査位置図(1:2000)

ない。堆積の年代は明らかではないが、藤原宮期の遺構面を壊し、中世の包含層（茶褐色土）に覆われる。このS X 381を取り囲むように、弧状に巡る素掘り耕作溝が数条ある。

青灰白色粘質土（黄褐色砂礫層）上面で検出した遺構には、池状遺構S X 385とこれに取り付く東西溝S D 384がある。S X 385は、調査区中央に広がる底が平らな池状のくぼみで、深さは約0.4mほど。北と西の肩は検出できたが、南および東の肩は洪水砂堆積S X 381によって壊されていたため、その規模は不明である。東西溝S D 384は調査区西壁あたりで、かろうじて北

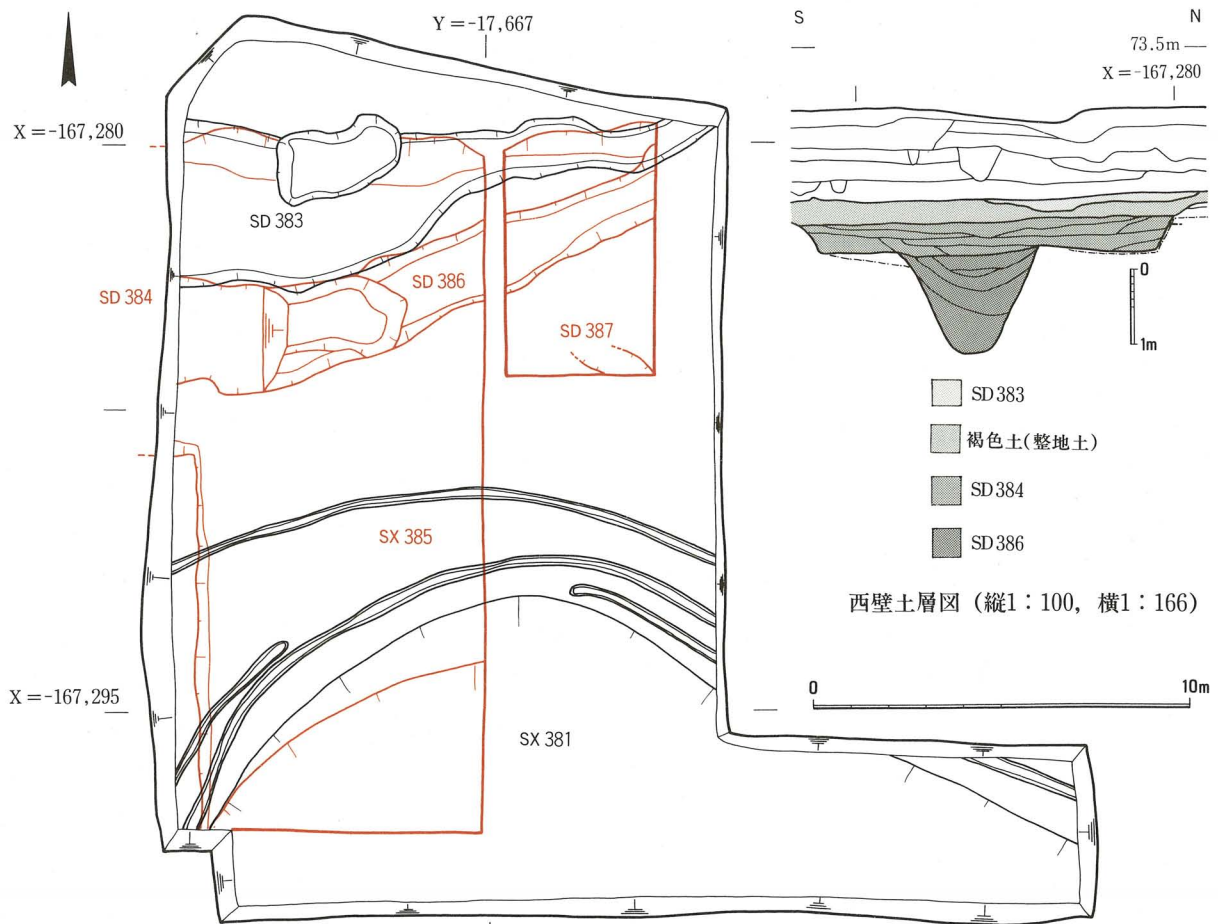


Fig.37 第75-15次調査遺構図(1:200)

岸と南岸を確認した。幅8m・深さ約0.4m、である。すぐ東で南岸が南に折れ曲がってS X 385の西岸につながるの、調査区西壁付近がちょうど両者の取り付け部分にあたると思われる。S D 386は、S D 384の下で検出した東西溝。東に浅く幅も狭くなり、北に曲がる。幅1.5~3m・深さ0.3~1mである。4世紀から5世紀にかけての土器が少量出土した。S D 387は、S D 384の下で検出した斜行溝である。幅1m・深さ0.8m以上ある。肩は途中から垂直におちる。わずか1m足らずを検出したのみで、遺物は弥生土器が1片出土したにとどまる。

遺物

遺物は、土器・土製品、瓦、木製品、銭貨などがある。

土器・土製品はS D 384とS X 385の接点部分を中心として出土したものにまとまりがある。飛鳥IV~Vを主体とする土師器・須恵器があり、奈良時代に下るものはない。土製品には上層の土馬1点のほか、鑄羽口やトリベなどの鑄造関係遺物があり、銅滴や銅スラグが伴出する。漆工関係遺物も多く、漆壺や漆パレットに使用した杯類、濾し布片などがある。

瓦は、軒丸瓦1点(6275 I・日高山瓦窯産)と軒平瓦3点(6641 E・6647 Cc・三重弧紋)と熨斗瓦1点のほか、少量の丸瓦(50点4.7kg)・平瓦(133点16.1kg)が出土した。軒平瓦6647 Ccは本薬師寺所用瓦であり、三重弧紋もその可能性がある。日高山2号窯(『概報9』)でも6647 Cbが出土したと関連するのであろうか。木製品は、紡輪、匙形木製品、黒漆塗り弓などがS X 385から出土した。

錢貨は和同開珎銅錢 1 枚がある。門構えの上端が隸書風に開く「隸開和同」で、背面の外縁内径がやや小さく、方郭外径がやや大きい。古銭研究者はこの特徴を「闊縁」「背広郭」とよんで、「古和同」に分類している。外縁外径2.52cm・重さ4.08g。

この和同開珎銅錢について、非破壊的手法による蛍光X線分析による鍍層表面からの分析をおこない、次のような結果を得た。

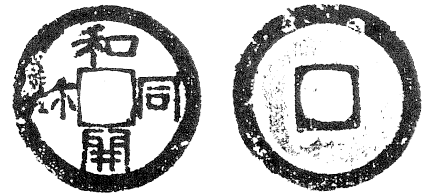


Fig.38 和同開珎 (実大)

ただし、分析値は、鏡の製作当初の成分を示すものではないので取り扱いに注意を要する。

銅(Cu) 錫(Sn) 鉛(Pb) ヒ素(As) 銀(Ag) ビスマス(Bi) アンチモン(Sb) 鉄(Fe)

91	0.3	0.2	0.4	0.3	0.2	6.6	0.5 (%)
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---------

この銅錢の成分の特徴は、アンチモンを数%含むことにある。和同開珎銅錢の分析例の多くは、主成分の銅に錫あるいは鉛を含むもので、アンチモンや砒素、ビスマスについては銅の不純物と考えられてきた向きがある。しかし、本例は伴出遺物と遺構の理解の上から平城遷都以前に存在したことが確かめられる和同開珎であり、別途おこなった分析によれば、藤原京条坊側溝から出土して平城遷都以前に埋没したことが確実な「富本錢」や錢文の上から「古和同」とされる「不隸開和同」についても、同様の成分構成であることが確かめられている。すなわち、アンチモンの多い一群は古い段階に鑄造された和同開珎銅錢として把握できる可能性があり、今後、砒素・ビスマスの多い一群などについても、検討を加える必要があろう。

まとめ

今回検出した藤原宮期の遺構には、東西溝 S D 384 と池状遺構 S X 385 がある。その形状などに不明な部分は多いが、S X 385 はこの坪の主殿などを囲む区画堀の西側に位置し、これから延びる S D 384 は西一坊大路の東側溝につながっていたと推測される。これらの遺構の堆積土とそれを覆う整地土から出土した土器は、ともに飛鳥 IV ~ V の藤原宮期を主体とし、器種構成および漆付き土器や鑄造関係遺物を含む点でも類似する。このことは、S D 384 と S X 385 が埋まり、その上を整地した時間が短期間であったことを示す。坪の中心部では、西側に向かって低くなる地山を整地している。この整地土（茶褐色砂質土）には藤原宮期の土器が少量含まれる。両者が同じか否か、今回は層位的に確認できなかった。既に指摘があるように（『報告 II』）、飛鳥 IV ~ V の土器研究の現状では、少量の出土土器の型式上の類似のみを根拠に両者を同一時期の整地とみなすことは危険と言わざるをえない。

また、S X 385・S D 384 出土土器には杯 A I・C のほか、高杯、蓋、皿などの大型器種や須恵器平瓶・提瓶などが含まれ、藤原宮内で使用され遷都時に廃棄された東面内濠 S D 2300 出土土器に類似する要素が強い。したがってここでは、本調査区の整地土と中心部のそれとは別のものであり、出土土器は平城遷都後ほどなくおこなわれた宅地の廃絶にともなって廃棄されたものと考えたい。この点は飛鳥 IV ~ V の詳細な再検討を待たねば決しないが、その際、本調査出土土器は重要な資料となろう。

また、S X 385 と整地土などに目立つ漆工・鑄造関係遺物は S X 385 の北部に集中していることから、調査区の北側に工房の存在が予想される。

B 第78-2次調査

(1995年4月～6月)

本調査は、市営住宅建設にともなう事前調査として、第75-15次調査に引き続き、その南において実施した。調査地は、藤原京右京七条一坊西南坪の西南隅に該当するが、前節で述べたように、第75-15次調査区では、南辺部が飛鳥川の氾濫で大きくえぐられ、本調査区の南西、七条大路と西一坊大路の交点で実施した第54-24次調査においても、飛鳥川が形成した砂礫層上では、後世の削平のため藤原宮期の遺構は確認できなかった(『概報19』)。したがって、当調査地もまた飛鳥川の氾濫を受けている懸念も強く、まず遺構面の残り具合を確認する目的で、調査区はL字形に設定した。調査面積は約400㎡である。

遺 構

基本層序は、上から表土・明灰褐色粘質土・灰褐色粘質土・粗砂混じり暗灰色シルト・暗灰色シルト・灰色砂礫である。地表から1.5～2 mで、南端を除く調査区のほぼ全体に灰色砂礫面が広がる。暗灰色シルトと灰色砂礫の上面で、各々中世の耕作溝を検出した。暗灰色シルト層は瓦器小片を含み、中世以降の堆積である。灰色砂礫層上部には、磨耗した歴史時代土器片を含み、飛鳥川の氾濫が形成した堆積とわかる。部分的に灰色砂礫層を1 m近く掘り下げたが、砂と礫の互層が続くばかりで、藤原宮期の遺構面はなく、堆積の時期すら確定できなかった。

灰色砂礫面は調査区の東側と南端で落ち込んで、暗灰色シルト層が厚みを増す。調査区南端の東西トレンチにおいて、この落ち込みの状況を確認する目的で、南北方向・東西方向のサブトレンチを設けた。南北方向のサブトレンチでは、調査区南端を東西に流れる小流路(幅5 m・深さ70 cm)、東西方向のサブトレンチでは調査区の東側を南北に流れる新古2時期の小流路(古期:幅4 m以上・深さ40 cm、新期:幅3 m・深さ30 cm)を検出した。南北小流路は当初、調査区の西寄りを行っていたものが、東に流路をずらす。さらに東には南から南東に流れて飛鳥川に合流する現代の水路があるので、この前身河川と考えてよかろう。いずれの小流路も灰色砂礫層を切って流れるが、出土遺物がほとんどなく、機能した時代は特定できなかった。ただし、南北小流路(新期)の東岸がえぐっている明茶色粘土・青灰色粘土といった土層は調査区の東へ延びている。本調査区以外の部分には同種の層は存在しないが、第49次調査区の藤原宮期遺構検出面を構成する土層と酷似する。

ま と め

本調査区では飛鳥川の氾濫により、藤原宮期の遺構は残っていない。ただし、本調査区の東端以東では藤原宮期の遺構面が残っている可能性が高い。周辺部の今後の調査に期待したい。

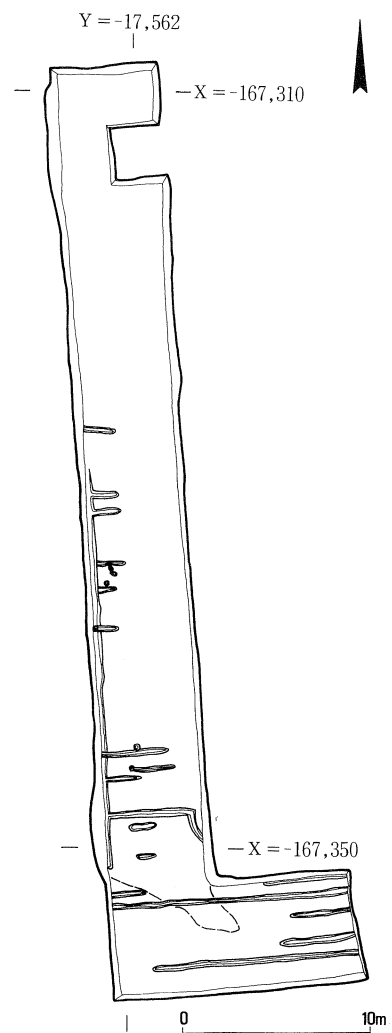


Fig. 39 第78-2次調査遺構図

5 本薬師寺の調査

A 1994-2次調査

(1995年2月～6月)

この調査は、1991年度以降継続的におこなっている本薬師寺跡の計画調査として実施した。調査地は、特別史跡本薬師寺跡の金堂と東西両塔の土壇のほぼ中間、中門・南面東回廊調査区(1992-1次調査『概報24』)の北、東塔西南隅部調査区(1993-3次調査『概報25』)の西で、それぞれ旧調査区と一部重複する。調査の主な目的は、中門と金堂の間の南北石敷き参道および東塔・西塔をつなぐ東西石敷き参道を確認するとともに、金堂前庭部の状況を明らかにすること、さらに先行条坊に関する資料をえることである。調査面積は558㎡である。

遺構

調査地の層位は上から、水田耕土、床土、茶褐色砂質土(遺物包含層)、暗褐灰色砂質土(遺物包含層)があり、これらを除き、整地土層の暗茶褐色砂質土(凝灰岩粉末が混じる)あるいは暗灰褐色砂質土層の上面で遺構を検出した(Fig.42)。さらに整地土の下で下層遺構を検出した。検出した遺構は、大きくは本薬師寺造営以後の遺構と造営以前の遺構にわかれる。

本薬師寺に関わる遺構

南北石敷き参道 S F 150と東西石敷き参道 S F 222 調査区の西寄りで S F 150を、北辺で S F 222を検出した。二つの参道とも、浅い掘り込み地業をおこなって玉石を敷きつめ、両側に縁石を立てる。

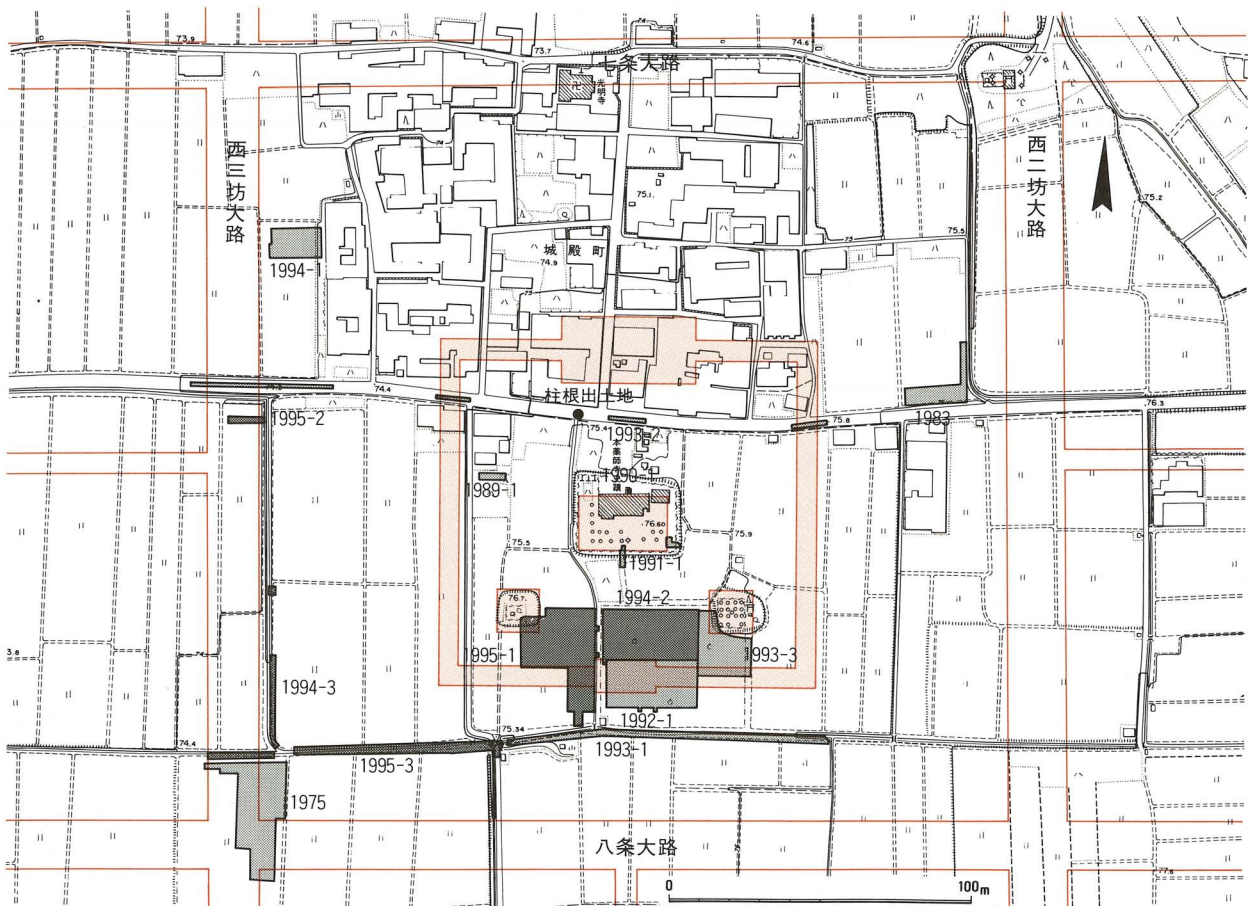


Fig.40 本薬師寺調査位置図(1:2500)

S F 150は、S F 222との交差点部分以外は、ほとんどの敷石が抜き取られていた。交差点部分の東南入り隅に東側縁石が1石だけ残る。これと西側縁石の抜き取り痕跡からはかると、幅は約4.4mである。S F 222はかなりの敷石が残るが、北側の縁石は調査区内では東端の1石しか残らない。幅は約3.4mで、S F 150より狭い。敷石は、中粒の花崗閃緑岩ないし石英閃緑岩、および細粒の閃緑岩が最も多く、これに少量の黒雲母角閃石花崗岩と変ハンレイ岩が混じる。分布からは石材を選択的に用いた様子はいかたがえなく（石材の鑑定は、埋蔵文化財センター・肥塚隆保による）。ただ、交差点部分でみるとS F 150とS F 222とでは用いられた敷石の大きさに違いがあり、S F 150では30～40cmほどの玉石を使うのに対し、S F 222ではそれより大ぶりの玉石を使う。この敷石の違いから判断して、中門から金堂に至るS F 150が先につくられ、これにとりつくかたちで東西にS F 222がつくられたとみてよい。S F 222は伽藍地の傾斜に沿って東から西にわずかに傾斜するが、交差点部分だけは水平になっているのも、このことと関連するのだろう。なお、交差点部分には燈籠などの施設はない。

東塔周囲を巡る溝 S D 265 南北溝 S D 265は、調査区東辺で検出した素掘り溝である。幅約3.5m、深さ0.3～0.4mある。溝底は南から北に傾斜する。S F 222との交点ではこれを完全に破壊しており、この南約8mは、あふれたように西側に浅く広がる。溝の東岸は、近代の溝によって大半が壊される。S D 265は調査区の東南隅で直角に折れて、東西溝 S D 207につながる。この2条の溝は、東塔周囲の石敷き S X 221の縁石から内法で約2.3mを隔てて掘削されており、東塔の周囲を巡る濠状の施設であろう。溝の中には大量の瓦や凝灰岩切石断片、玉石などが投棄されていた。瓦には軒丸瓦16点、軒平瓦16点が含まれる。

井戸 井戸 S E 267は、南北溝 S D 265の埋め土を掘り込んだ素掘りの井戸。円形で、検出面での直径が1.8m、深さは0.9mある。埋め土の上層に多量の瓦が含まれていた。

井戸 S E 278は、調査区北辺にある井戸。東西2.7m・南北2m以上・深さ1.5m、ほぼ円形で、北半は調査区外にある。埋め土の中層以上、特に上層に多量の瓦が含まれる。軒丸瓦15点、軒平瓦7点が出土した。S E 278の東に重複してこれより古い土坑 S K 279がある。

土坑（瓦溜め） 土坑 S K 272は、調査区の中央やや東より、東西石敷き参道 S F 222の南側にある。東西6.3m・南北7.5m・深さ0.2mの不整形な浅い瓦溜めである。土坑の西北部に集中して瓦が出土した。軒丸瓦33点、軒平瓦30点がある。これらとともに土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯・甕などが出土した。土師器皿の多くは灯明皿で、10世紀前半のものである。

土坑 S K 276は、S K 272の北に接しこれより古い土坑。東西3.4m・南北3m・深さ1.7mの楕円形の平面形をしている。埋め土の中層以上に多量の瓦を含み、土師器・須恵器のほか、上層から垂木と床桁の2本の建築部材が出土した。土師器には平城宮IV以降の皿Aがある。

土坑 S K 285は、S K 272の南西にある土坑。東西4.8m・南北3.8m・深さ0.25m。軒丸瓦6点と軒平瓦6点の他、丸・平瓦が出土した。土器は、土師器皿・杯・椀・甕、須恵器がある。土師器皿は、S K 272と同じ10世紀前半の灯明皿である。

土坑 S K 287は、S K 272の西、南北石敷き参道 S F 150の東に接する瓦溜め。南北6.1m・東西5m・深さ0.2mほどの浅い土坑である。土坑中央に瓦が大量に堆積する。平瓦は凸面を上に向けたものが多く、ほかの瓦溜めのようにただ瓦片を投棄したのではなく、敷き並べたようにみえる。土坑の位置が、先行条坊西三坊々間路の東側溝に重複することを考えると、この部

分の不同沈下をならすために、瓦を敷いて埋め立てたのであろう。軒丸瓦13点、軒平瓦33点を含む多量の瓦のほか、土器が出土した。軒平瓦の型式をS K 272と比較すると、6641 I や6641新種が多くあり、逆に変形偏行忍冬唐草紋の6647が少ないことが特徴といえよう。土器は、土師器皿・杯、須恵器杯・甕などがある。土師器はS K 272と類似した10世紀前半の灯明皿が多い。

土坑S K 293は、南北石敷き参道S F 150の上にある土坑。東西1.8m、南北1.2m。

掘立柱建物 掘立柱建物S B 296は、南北石敷き参道S F 150の東にある小規模な建物である。南北1間(3.6m)、東西2間(1.8m等間)の正方形である。柱穴掘形と柱痕跡から10世紀代の土師器皿が出土した。遺構の重複関係からは、土坑S K 287より古い。

掘立柱塼 掘立柱東西塼S A 291とS A 299がある。S A 291はS F 150を横断する塼あるいは柵。柱間1.3~1.6mで9間分を検出した。S A 299はS A 291の北にあり、西で南にふれる。

その他の遺構 S X 277とS X 280は、東西石敷き参道S F 222のと重複する柱掘形である (Fig. 41)。S X 277は、掘形一辺約1.5m・深さ1.5m。掘形の底に、建築部材(通し肘木)がほぼ南北方向に据え付けてあり、その周囲には軒丸瓦や熨斗瓦などの瓦や凝灰岩切石断片が詰め込んであった。部材は礎盤として埋めたものであろう。S X 280も全く同じ遺構で、一辺1.4m・深さ1.1mの掘形に建築部材(通し肘木)を南北に据え付ける。部材の両端は掘形の壁に接し、壁をえぐって部材を水平に据えようとした痕跡があった。部材の周りには凝灰岩切石断片が詰め込まれていた。二つの掘形は、部材の据え付け方が共通し、部材の上面がほぼ同じ高さにあること、さらに、後述するように2本の部材が本来は同じ建物の部材だった可能性が高いことからみて、一对の遺構であろう。瓦や石材片を多量に含む抜き取り穴は東西石敷き参道S F 222を壊しているが、掘形の外側の辺、つまりS X 277の南辺とS X 280の北辺がS F 222の縁石の位置にほぼ重なることから、S F 222を十分意識して設けられた施設と考えられる。S X 277とS X 280の位置は石敷き参道の交点から東に14m、金堂基壇東辺の南延長上にあたり、上記のような遺構の状況からみて、幢竿のようなものを立てる施設であろう。



Fig.41 柱掘形S X 277 (左;南から)とS X 280 (右;北西から)

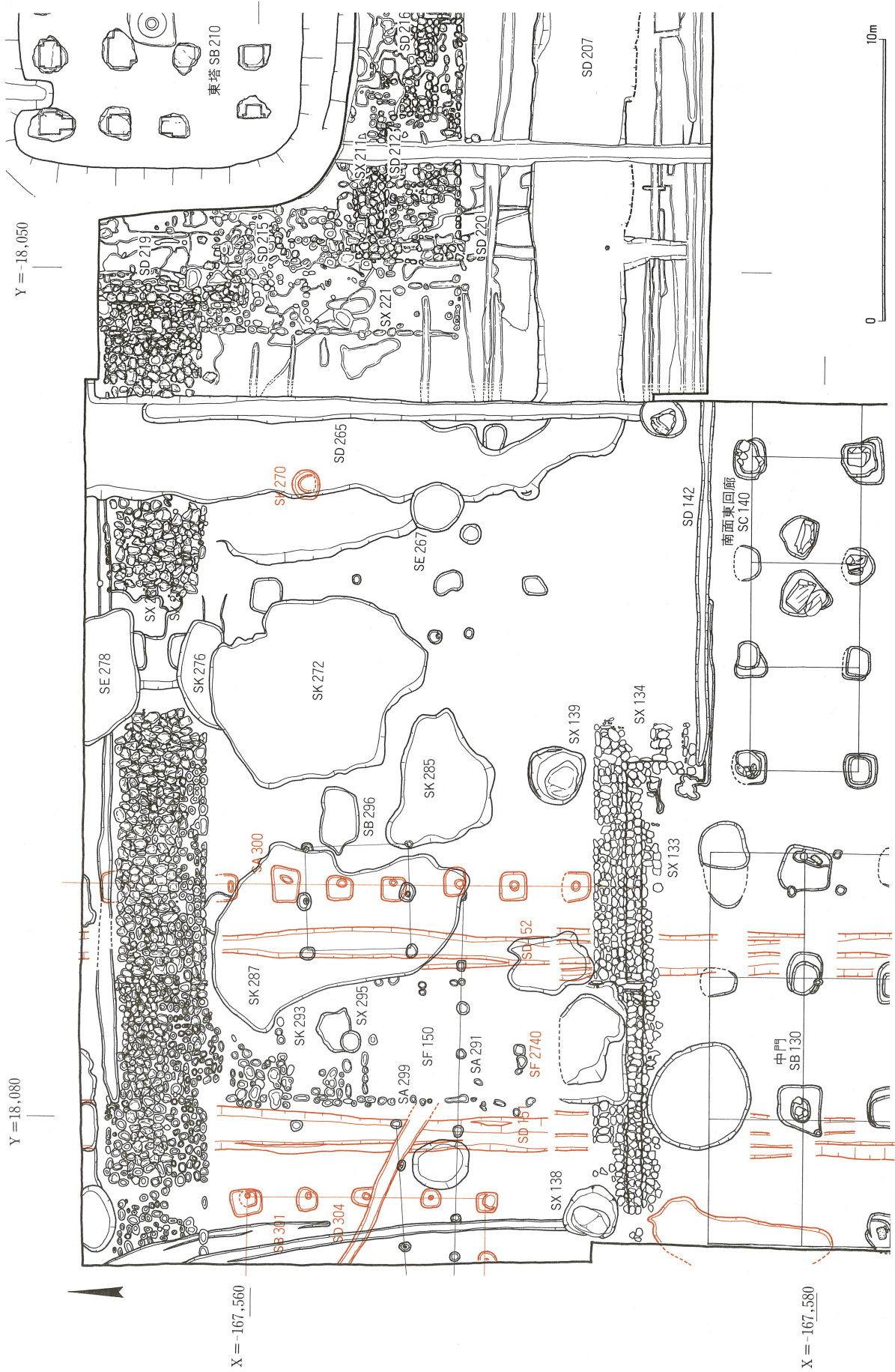


Fig.42 本葉師寺1994—2次調査遺構図 (1 : 200)

埋甕遺構 S X 295は、S F 150の中央、土坑 S K 293の下層で検出した。上面での直径約0.8m・深さ0.6mの穴に小石を詰め、その上に半截した大和型の土師器甕が内面を上に向けて置かれてあった。甕の上までには瓦が大量に詰め込んであり、この部分で穴が大きく広がることからみると、抜き取り穴に瓦を投棄したようである。S X 295はS F 150の中軸線上にあり、S F 222の中軸線からは南に約6.5mを隔てる。地鎮など祭祀関連の遺構とも考えられるが、内容物がなく性格は明らかでない。土師器甕の型式は飛鳥IVからVである。

このほか、中世以降の素掘り耕作溝が多数ある。これらは包含層の上面あるいは中位から掘り込まれている。これらは当然、本薬師寺廃絶以後の遺構である。

本薬師寺造営以前の遺構

西三坊々間路 南北石敷き参道 S F 150の真下で、西三坊々間路 S F 2740とその東西両側溝 S D 151・S D 152を検出した。中門の下層で検出した坊間路の北延長である。S F 2740は路面幅4.6～5 m、側溝の溝心々距離は約6 mで、S F 150と中軸線がほぼ一致する。西側溝 S D 151は幅1.1～1.6m・深さ0.5～0.6m、東側溝 S D 152は幅1.3～1.7m・深さ0.3～0.4m。堆積土は上下2層あり、飛鳥IVの土師器・須恵器が出土した。

南北塀 S A 300 西三坊々間路東側溝 S D 152の溝心から東約2.2mの位置にある掘立柱塀。柱間1.9～2.25m。柱掘形は一辺約1 m・深さ約0.5mあり、柱はすべて抜き取られている。

掘立柱建物 S B 301 西三坊々間路西側溝 S D 151の西にある、掘立柱南北棟。桁行4間、梁間推定2間で、柱間はすべて2.1m（7尺）等間である。南妻柱穴には径約15cmの柱が残る。東側柱はS D 151溝心から西約2.2mの位置にある。

このほか土坑や溝がある。土坑 S K 270は、調査区の東側、南北溝 S D 265の下層で検出した。直径約1 m・深さ約0.9m。斜行溝 S D 304は幅約0.6mほどの素掘り溝。本薬師寺造営時の整地土の下で検出したが、西三坊々間路西側溝 S D 151よりは新しい。東延長を確認できなかったが、あるいは中門の下層で検出した素掘り溝 S D 153につながるかもしれない。

遺物

大量の瓦類のほか、土器、金属器、建築部材、凝灰岩切石などが出土した。

土器 土器には、縄紋土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、7世紀後半の土師器・須恵器、奈良・平安時代の土師器・須恵器のほかに、中世の瓦器・磁器などがある。ここでは、比較的まとまって出土した西三坊々間路 S F 2740の側溝 S D 151・152、土坑 S K 270・272出土土器を図示した（Fig.43）。

西三坊々間路東側溝 S D 152出土の土師器には、杯 B（6）、皿 A（8）、高杯 B（9）、甕（10・11・16）、須恵器には杯 B（15）、杯 G 蓋（12）があり、西側溝 S D 151出土の土師器には、杯 A（5）・B（7）・C（2～4）・H（1）、甕（17）、須恵器には杯 G（13）、大型椀蓋（14）がある。土師器杯 A・C、皿 A、須恵器杯 Bなどは、総体的に飛鳥IVの特徴をそなえ、藤原宮内の先行条坊側溝から出土する土器群と共通した要素をもっている。

S K 270からは、土師器杯 A（19）・C（20）、甕 A（21）、須恵器壺 A 蓋（18）が出土した。いずれも飛鳥IVのものである。杯 A は底部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデした後、ヘラミガキを加える。杯 C は口縁部にヨコナデを施すもので、内底面にラセン、口縁内面に放射暗文を施す。甕は体部内外面にハケ目を加えたものであるが、下半部では外面にヘラケズリ、内面は

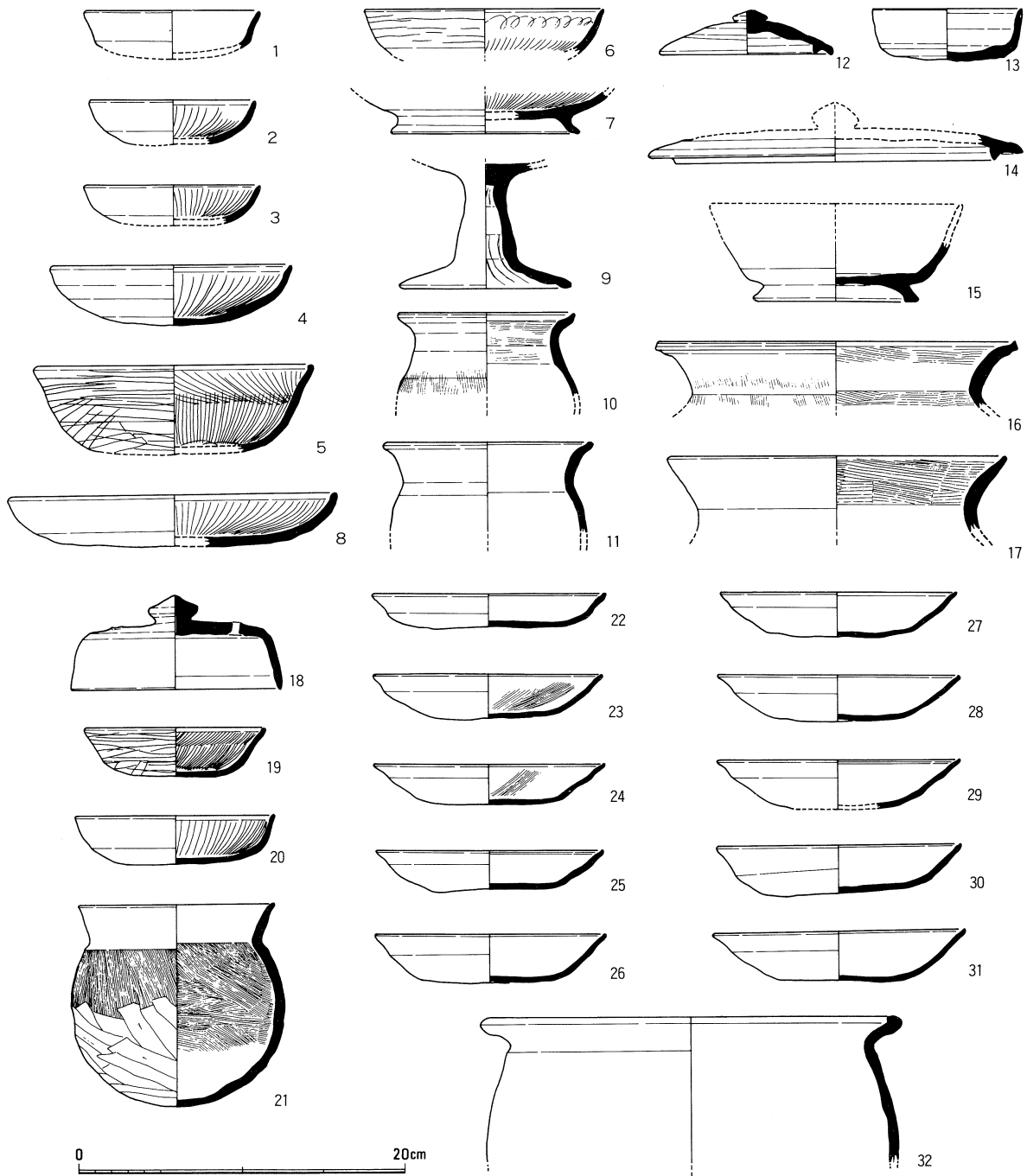


Fig.43 本薬師寺1994-2次調査出土土器(1:4)

強いナデによってハケ目を消している。白灰色を呈し、近江地方の製品と思われる。壺A蓋は宝珠形つまみをはりつけたもので、頂部には焼成前にあけた円孔が2カ所ある。

S K 272出土土器には、土師器杯A(23~31)、皿A(22)、甕(32)がある。杯A・皿Aはいずれもe手法で調整する。杯Aは口縁端部を内側にわずかに肥厚させるもので、口径13.8~15.1cm・器高2.4~3.0cm。内面にハケ目の残るもの(23・24)や油煙の痕跡を残すもの(26)がある。皿Aは、口径14.2cm・器高2.0cm。甕は口縁端部を内側に折り曲げたもので、外面にナデ、内面に指おさえの痕跡が残る。これらの土器群には小皿やc手法調整の杯皿類が認められないことから、年代的には10世紀前半と考えられる。

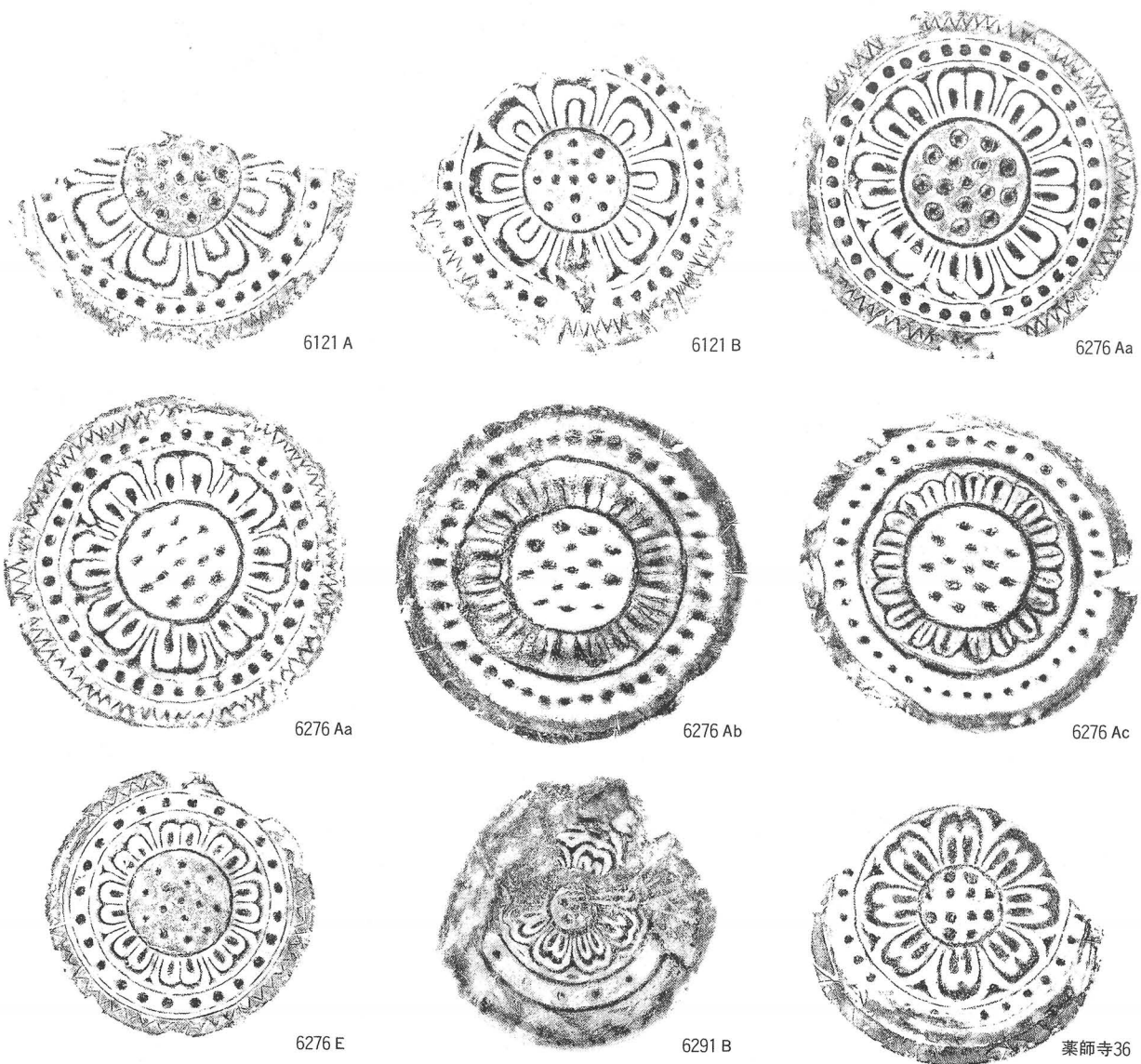


Fig.44 本薬師寺1994-2次調査出土軒丸瓦(1:4)

瓦類 調査区全体から出土したが、特に南北溝S D 265や土坑S K 272・276・285・287などからの出土量が多かった。

軒瓦は、軒丸瓦375点、軒平瓦316点、総計689点ある (Fig.44・45、Tab.5)。ほかに、熨斗瓦185点と面戸瓦170点、刻印瓦13点がある。

軒瓦の型式別出土点数は、軒丸瓦6276Aa-軒平瓦6641Hの組み合わせが最も多い。本屋の屋根(以下、本屋根と略す)用ではこのほか、軒丸瓦6121A-軒平瓦6647Gおよび軒丸瓦6276Ab・Ac-軒平瓦6641新種の組み合わせがある。一方、裳階屋根用の小型の軒瓦は、昨年東塔西南隅部の調査で復原した、軒丸瓦6276E-軒平瓦6641Kの組み合わせがある。これに加え、軒平瓦6647Iが6641Kとほぼ同量あり、6647Iもこれらの約半分量出土しているので、以上2種の軒平瓦も6276Eと組み合ったと考える。6276Eに彫り直しは確認できないが、6641Iと組み合わせる6276Eは、瓦範がやや磨滅することと瓦当が分厚いことで区別できる。

以上6組の軒瓦のうち、本屋根用では6276Aa-6641Hと6121A-6647G、裳階用では6276E-6641Kと6276E-6647Iの計4組を創建軒瓦に考える。6276Ab・Ac-6641新種と6276E-6641

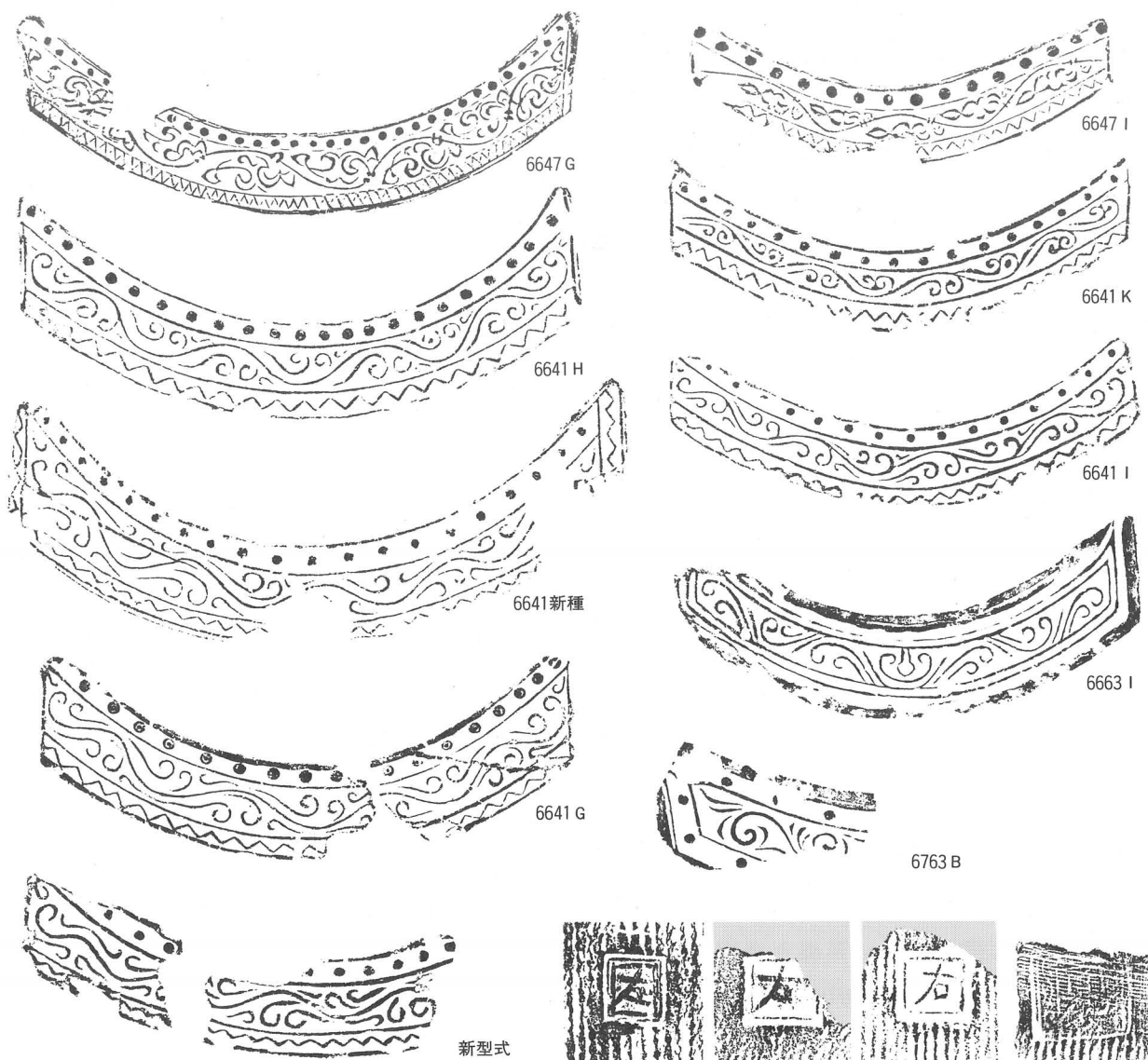


Fig.45 本薬師寺1994-2次調査出土軒平瓦(1:4)と刻印瓦(1:2)

Iの2組は胎土と焼成が酷似し、同時期に供給されたと判断できる。出土量からみて補修用の瓦であろう。6276Acと6641新種は平城薬師寺での出土が報告されておらず、供給の時期など今後の検討を要す。奈良時代以降の軒瓦は、これまで同様ほとんどが、平城薬師寺あるいは平城宮と同範である。

次に、これらの軒瓦について、南北溝SD265を含む27ライン(国土座標Y=-18,060)以東と、土坑SK272・276・287などを含む27ライン以西とにわけて各型式の出土点数を比較しよう(Tab.5)。27ライン以東では、軒丸瓦6276Aa・6276Eおよび軒平瓦6641H・6641Kで各々の約70%を占める。これ以外では6647I(10%)が多い程度である。27ライン以西でも軒丸瓦は6276Aa・6276Eが計66%と最も多いが、6121A・B20点(7%)も目立つ。6121A・Bは27ライン以東からはほとんど出土していない。軒平瓦では6641H・6641Kは38%しかなく、6647Cb・Cc(9%)、6647G(19%)、6647I(12%)など変形偏行忍冬唐草紋軒平瓦がほぼ同量あるのが注目される。また、6641Iと6641新種も27ライン以東より多く出土し、特に6641Iの出土点数の違いは明白である。

27ライン以東の型式別出土点数の示す状況は、東塔西南隅部の調査(『概報25』)とほとんど

同じで、これを東塔の所用軒瓦と認めてよいだろう。これに対して、27ライン以西の状況はこれと大きく違い、大きくは金堂の屋根修理に伴う廃瓦が出土したと考えられよう。

道具瓦は熨斗瓦と面戸瓦がある。熨斗瓦は、すべて切り熨斗瓦である。面戸瓦は、本屋根用の蟹面戸瓦と鯉面戸（登り面戸）瓦、裳階用の蟹面戸瓦がある。本屋根用蟹面戸瓦は全長35cm前後・幅14~18cm、舌部の長さ12~14cm。鯉面戸瓦は完形品が1点あり、全長47.5cm・幅16.5cm、舌部の長さ18.3cmである。両端を斜めに切り、舌部両側も斜めに切り込む。裳階用の蟹面戸瓦は、長さ25cm、幅14cm、舌部の長さは11cmある。

面戸瓦はすべて粘土板巻き付け作りであるが、本屋根用鯉面戸瓦は丸瓦よりも全長が長い。また、本屋根用蟹面戸瓦は、丸瓦筒部とほぼ同じ長さだが、凹面に玉縁段部の痕跡を残すものが全くない。したがって、これらの面戸瓦は丸瓦用の粘土円筒を半截加工するのではなく、専用の筒形模骨を使用した可能性が高い。裳階用の蟹面戸瓦は全長だけでみると丸瓦筒部を利用して製作可能だが、瓦の厚みが倍近くあり、これも面戸瓦専用に製作された可能性がある。

丸瓦は、21,060点（2,596.3kg）、平瓦は65,471点（5,271.1kg）が出土した。本屋根用の通常の大きさのものと、裳階用の小型品がある。丸瓦は大半が玉縁丸瓦で、少量の行基丸瓦がある。玉縁丸瓦は縄叩き、行基丸瓦は斜格子叩きで、ともに粘土板巻き付け作りである。凸面を丁寧にナデ調整するものが大半。平瓦はほとんどが粘土板桶巻き作りだが、タテ縄叩きの一枚作りもある。桶巻き作り平瓦は、縄を三つ編みにした「ハ」字形のタテ縄叩き目を残すものが最も多く、次いで右撚りの細いタテ縄叩き目、斜格子叩き目の順になる。斜格子叩き目の平瓦は行基丸瓦とセット。ほかに、縄叩きと格子叩きが重複する例が少数ある。

平瓦には刻印瓦がある。すべて凸面タテ縄叩きの粘土板桶巻き作り平瓦である。いずれも凸面広端近くに押捺する。界線と文字ともに凸表現である。縄は右撚りで、ハ字形の縄叩きの例はない。「左」の刻印は初出。タテ2.0cm、ヨコ1.8cm、二重の界線の中に正字の「左」をあらわす。3点出土。「右」の刻印はa・b 2種ある。a種はタテ2.0cm、ヨコ2.2cm、界線の中に「右」をあらわす。「右」の「口」の部分が第一面につながる。既出で、平城薬師寺からも出土。1点出土。b種は初出。タテ1.9cm、ヨコ2.1cm、界線の中に「右」をおく。9点出土。

Tab. 5 本薬師寺1994-2次調査軒瓦型式別出土点数表

軒丸瓦	SK272	SK285	SK287	27ライン以西	SD265	27ライン以東	総計	軒平瓦	SK272	SK285	SK287	27ライン以西	SD265	27ライン以東	総計
6121A	1			14		1	16	6641G	2		1	5			5
B	2		1	6			6	H	4		6	64	11	14	35
6276A a	8	5	4	122	8	38	162	K	4	1	2	28	22	115	16
A b	1	11	1	5	134	8	5	I	4		13	15	15	1	54
A c	2	(12)	(8)	7	(169)	(10)	(177)	新種			7	9	3	2	16
E							85	6647C b	3			9			1
6279B	12		3	64	6	19	1	C c	1			3			9
薬師寺6				1		1	1	6647G	9	1		43	2	4	3
計	27	6	12	254	16	68	328	I	1	3	2	28		7	49
6012C				1			1	6647				4			5
6225A	1			3		1	4	軒平瓦新A	1	1		2			2
B						1	1	新B				2		2	5
6291B						1	1	重弧紋				3			3
薬師寺32			1	7			7	計	29	6	32	230	16	71	307
33				1		3	4	薬師寺239				1			1
36	2			9		5	14	6663 I	1		1	4			4
38				1			1	6721						2	2
平安型式不明	3			8		1	9	6763B				2			2
計	6		1	35		12	47	計	1		1	7		2	9
総計	33	6	13	289	16	80	375	総計	30	6	33	237	16	73	316

金属製品 金銅製品と鉄製品、銭貨がある。金銅製品は、垂木先飾金具1点、釘15点、金銅板1点である。垂木先飾金具は長さ4cmほどの断片。釘は径0.9cmほどの半球形頭部の角釘。頭部のみ鍍金する。金銅製品は、出土17点のうち14点が、27ライン以東に分布し、東塔に関係する。鉄製品は、鉄釘など30点ほどが出土した。釘は方頭釘と折釘があり、27ライン以西から多く出土した。銭貨は、天聖元寶（北宋銭；初鑄1023年）が1点、床土から出土した。

石製品・石材 西三坊々間路西側溝から粘板岩製砥石が1点出土。滑石製白玉が1点あるほか、弥生時代のサヌカイト製石鏃と剥片刃器がある。石材はほとんどが凝灰岩切石である。

建築部材 S K 276から2点、S X 277とS X 280から各1点の合計4点が出土した (Fig.46)。

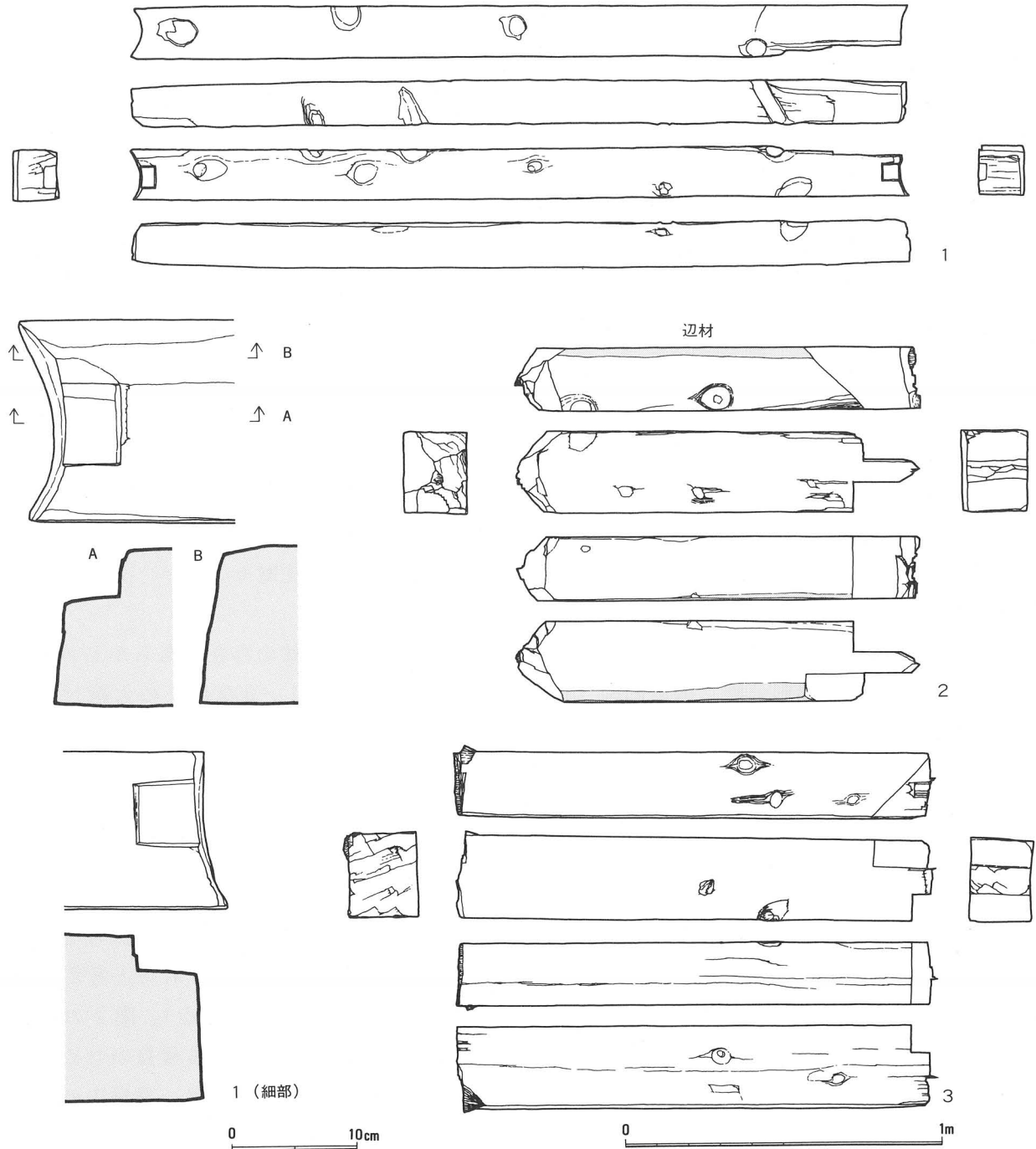


Fig.46 出土建築部材実測図

土坑 S K 276 から出土した建築部材 2 点の内、1 点 (Fig.46-1) は、床板掛け (根太に相当するが大引のように太い材) で、断面の幅約 16cm・高さ約 14cm、全長約 2.42m をはかる。両端部には接する円柱に合わせた繰りと、床板掛けの乗る栓を受けるための切り欠きがあり、法隆寺伝法堂のものと同じ形式である。両端の繰りから復原される柱径は 1 尺前後である。もう 1 点は、朽損が甚だしく、原形を明確にしえなかったが、丸桁もしくは丸垂木の一部ではないかと思われる。柱掘形 S X 277 から出土した建築部材 (Fig.46-2)、およびこれと対称の位置にある柱掘形 S X 280 から出土した部材 (Fig.46-3) は、ともに通り肘木の上木を、両端部を切断して礎盤に再利用したものである。材種や部材寸法が共通することから、同一建物の部材と思われる。部材の寸法は、2 が断面の幅が端部で約 19 (20; 3 の部材の場合、以下同じ) cm、中央部で約 20 (22) cm、^{せい}成が約 25 (26) cm、残存全長が約 127 (150) cm を測る。仕口は、両材ともに上下の欠きの深さが約 9 cm あり、したがって中央に残る材厚は前者が 6~7 cm、後者が 8~9 cm とやや異なる。また、両材ともに新材と見まがうほど良好な状態で出土したので、当たり痕跡がなく手斧仕上げであることもみてとれた。この通り肘木の材寸は、平城薬師寺東塔や法隆寺の諸堂と比較すると、主要堂宇の部材として適当であり、中門の部材とするには大きすぎるとと思われる。次に述べる伐採年代と出土位置を勘案すると、東西両塔いずれかの部材であった可能性が高い。

出土建築部材の年輪年代測定

出土した建築部材 4 点の中から 1 点 (柱掘形 S X 277 出土の通し肘木; Fig.46-2) を選定し、年代測定をおこなった。材種はヒノキであった。この部材から計測した年輪数は 192 層分、この試料パターンとヒノキの暦年標準パターン (前 37 年~845 年) との照合の結果、192 層分の試料パターンは暦年標準パターンのなかの 504 年~695 年の年代位置で照合が成立した。この部材には辺材部 (3.3cm) が完存していたので、この木の伐採年は 695 年 (持統九年) と確定した。

(埋蔵文化財センター: 光谷拓実)

本薬師寺付近の微地形分析

微地形分析の目的と方法 現地地表下 2 m 程度までに埋没している遺跡の存在をあらかじめ推測する方法として、微地形分析 [微地形図 (10cm 等高線図) の読図と 1/5000 以上の大縮尺空中写真の判読] が有力な手法としてあげられる (高橋 1987)。特に微地形図で表現された現在の地表の微起伏は、地下に埋もれた地形を反映することが知られている。本報告では、本薬師寺付近の微地形図 (10cm 等高線図) を作成し、その読図をおこなって、地下に埋没した地形を推定した。微地形図は、橿原市作成の 500 分の 1 の都市計画図に記載される標高データを基準にし、割り込み法を用いて作成した (Fig.47)。

本薬師寺周辺の微地形 本薬師寺は飛鳥川の左岸の完新世段丘面に位置する。本薬師寺と飛鳥川の間には、低い段丘崖が認められる。この段丘崖は、9~11 世紀頃に形成されたと考えられる (河角 1994)。その崖下の現氾濫原面においては自然堤防が発達する (A 地点)。崖下の谷地形 (B 地点) は、飛鳥川の旧河道である。この段丘崖下には、段丘形成による侵食のため藤原京関連の遺構は遺存しない。この段丘崖の存在しなかった本薬師寺創建当時は、飛鳥川の氾濫の影響を受けやすかったものと推測される。

等高線が疎な平坦面が本薬師寺伽藍中枢付近をはじめとし数カ所認められ、大規模な造成が

想定される。伽藍中枢付近の平坦面が最も広く、寺域の南東角付近、北西角付近で等高線が密であり、直角に屈曲する。このことから、本薬師寺造営時に寺域の南東角付近を切り土し、北西角付近に盛り土を施し、整地した状況が推測される。伽藍中枢付近の傾斜は、遺構面を反映するのか、後世の水田造成を反映するものか、現在のところ不明である。

本薬師寺周辺の現地形の最大傾斜方向は、基本的に飛鳥川の流れの向きである南東-北西方向を示す。しかしながら、微地形図では、等高線の方が南北あるいは東西方向を示す場合が多い。また、八条大路と西三坊大路・西二坊大路との交差点付近（C・D地点）においては、等高線が直角に屈曲している。さらに、八条大路や七条大路に相当する部分（E・F地点）では、等高線が尾根状に突出した部分がみられる。これらは条坊道路が影響した可能性が高い。

まとめと課題 以上、読図の結果から10cm等高線図は、埋没した微地形だけではなく、地形改変をとまなうような埋没した遺構も反映する。今後、発掘成果と微地形図を比較することにより図から何が読みとれるか解明する必要があり、そのためには広範囲におよぶ微地形図の作成が望まれる。

（大阪府文化財調査研究センター：河角龍典）

高橋 学 1987年 「志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発」（兵庫県教育委員会『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県文化財調査報告第40冊）

河角龍典 1994年 「飛鳥・藤原地域における歴史時代の環境変化と土地利用」（1994年度人文地理学会大会研究発表要旨）



Fig.47 本薬師寺周辺の微地形図（1：2500）

ま と め

本薬師寺1994-2次調査では、当初の予想通り、東西方向と南北方向の2条の石敷き参道をみつけた。二つの参道の交差点部分には燈籠などの施設はない。使用された玉石の大小からみて南北石敷き参道S F 150施工後に東西石敷き参道S F 222が施工されたことも判明した。

玉石敷き参道は、飛鳥寺に発掘例があるものの類例に乏しい。本薬師寺は、塔を東西に2基建てたことによって、中門と金堂、東西両塔に囲まれた空閑地が生まれるが、この部分に玉石敷きの参道を設けて堂塔の間の一体感を表現したと思われる。

参道に関する問題点はまず、中門周囲の石敷きS X 134と南北石敷き参道S F 150との関係である。S X 134中央にある玉石列について、先に、①単なる工程差とする解釈と、②造成時期の差で、S X 134の外側部分を後の付加とする解釈、を示した(『概報24』p.88)。今回、S F 150は残存状況が良くなく、改修の有無を決するには至らなかった。また、金堂に至る参道がS F 150だけなのか、金堂南面に想定される三つの階段すべてにあるのかも今後の課題として残った。想定される金堂南面東階段位置のS F 222北側は、井戸S E 278などによる破壊が著しく、この部分での南北石敷き参道の有無を明らかにできなかったからである。なお、平城薬師寺金堂では前面を発掘していないため不明だが、1995年度におこなわれた平城薬師寺講堂の発掘調査では講堂背面の階段三つ各々から石敷き通路が延びることを確認している。

先行条坊に関しては、中門と同じく整地土の下層で西三坊々間路を確認し、条坊道路を整地して埋め立てた後に本薬師寺が造営されたことを確実にした。今回は条坊道路に加え、藤原京右京八条三坊東南坪の西辺を限る掘立柱塀1条と、西南坪にたつ南北棟建物1棟を確認した。これらの塀と建物は、本薬師寺造営以前の京域が、単に条坊道路が設置されただけのものだったのではなく、居住域としてすでに利用されていたことを物語る。つまり、条坊設定後一定の時間経過ののち、本薬師寺が造営されたのだ。このことは、本薬師寺の造営開始年代と、藤原京条坊施工年代との両方に重要な意味を持つと考える。

文献などから、本薬師寺は天武九(680)年に発願され、天武崩御の朱鳥元(686)年には未完成であったが、持統二(688)年に無遮大会を設けたときには、なにがしかの堂塔(少なくとも金堂)は建ちあがっていた、とみるのが一般的な理解である。問題は、造営工事に着手したのがいつだったかで、発願直後とする説、『僧綱補任』が記録する天武十一(682)年説、持統朝説、などがある。一方、藤原京の条坊施工年代も解決をみていない。藤原宮に遷居するのは持統八(694)年だが、藤原宮大極殿北方の運河S D 1901Aからは天武十二年から十四年(683~685年)の紀年木簡が出土し、この頃すでに条坊施工と宮の造営が進んでいたことが判明している(『概報8』)。天武五(676)年以降、『日本書紀』には都づくりに関わる記事が散見するので、条坊施工年代は天武末年からさらに遡る可能性もはらみ、藤原京条坊施工時期は藤原宮造営過程だけでなく、本薬師寺造営過程ともからめながら議論すべきであろう。

これらと密接に関連するのが、柱掘形S X 277から出土した通し肘木である。年輪年代測定の結果、この部材のヒノキは持統九(695)年に伐採されたことがわかった。持統九年といえば、『日本書紀』の記載する持統十一年(文武元年)の開眼会のわずか2年前、「薬師寺の構作ほぼ了る」とある『続日本紀』の文武二年の記事からも3年しか離れない。部材は伽藍の主要堂塔にしか使用できないものとなれば、出土位置からみても東塔をその第一の候補と考えられ

ないだろうか。東塔の建立が持統朝の末期とすると、平城薬師寺の東塔擦銘が本来、文武朝に撰文された本薬師寺の塔のものだったとする説が魅力をもってくる。一方、これを講堂の部材とみると、『薬師寺縁起』に持統二（688）年造顕という講堂本尊の阿弥陀繡仏との関連が問題となる。これまた、薬師寺論争に一石を投じる発見といえよう。

B 本薬師寺1994-3次調査

（1995年3月～4月）

この調査は、農業用水路改修に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、本薬師寺伽藍地の西辺にあたる。南北の水路改修にともなう部分で2カ所（I・II区）、東西の水路改修に伴う部分で1カ所（III区）に調査区を設定した（Fig.40）。調査面積は110㎡である。

遺構 I・II区では時期不明の小穴以外、顕著な遺構はない。III区で西三坊大路東側溝SD105を検出した。幅1.2m・深さ0.3m。中層には流水を示す砂層が堆積する。SD105と心々距離で14.3mの位置に幅4.8mの浅いくぼみを検出したが、堆積土の状況からは道路側溝とは思われず、遺構検出面の高さからみても西側溝は削平されたと判断した。1975年調査では、SD105の東約5mの位置で、本薬師寺伽藍西辺の築地塀雨落ち溝と推測された南北溝SD110を検出しているが、今回は確認できなかった。

遺物 瓦と土器が出土したが、量は少ない。軒瓦は、軒丸瓦4点と軒平瓦2点である。

まとめ 1976年の調査では、西三坊大路の路面幅を15.2mとしたが、今回は、その西側溝の北延長部を確認しなかった。後世の削平もあろうが、本薬師寺寺域西辺におけるその後の調査では、東側溝から西8.3mで南北溝を確認しており（1993-2次調査『概報24』）、西三坊大路の路面幅については再検討が必要であろう。

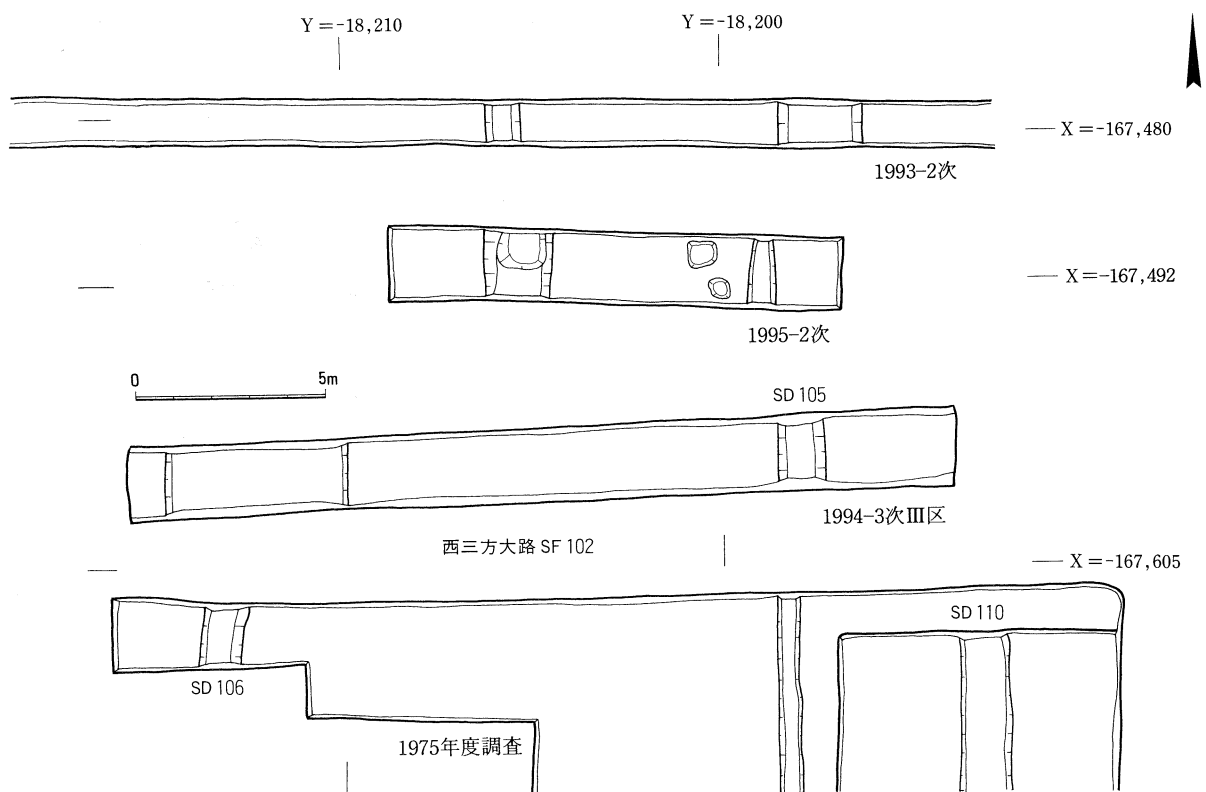


Fig.48 本薬師寺1994-3次調査III区および周辺の調査遺構図（1：200）